
ツインスピカ～追加レシピ集～

遠堂 沙弥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ツインスピカ〜追加レシピ集〜

【Nコード】

N7193H

【作者名】

遠堂 沙弥

【あらすじ】

これは本編「ツインスピカ」で書かれなかつたエピソード集です。基本的に1話完結モノになっています。世界観、キャラクターなどは本編を元に構成されているので、それらを知りたい方はぜひ本編の方をご覧ください。* * 不定期更新です* *

レシピ・1 「ものすごく普通な勇者検査」(前書き)

アギトとリユートが異世界に初めて来て、光の戦士かどうかの検査を受ける時の話が書かれています。

レシピ・1 「ものすごく普通な勇者検査」

ここは謎の洋館・・・、ひよんなことから異世界に迷い込んだ青い髪の少年アギトとリュート。

洋館内にある一室に軟禁されて、1時間程経過しようとしていた。室内は至って普通・・・まるで外国にあるお洒落な個室のようだった。

落ち着く色で統一されている壁紙、持ち主の品の良さがうかがえる家具・・・。

ベッド2つにテーブル、イスなどなど・・・一時の間生活をするには不自由なさそうな部屋に二人は閉じ込められていた。

カーテンで閉め切っていた窓の方には当然この洋館を守るように警備していた軍人が見張っている。

外からの侵入者だけではなく、アギトとリュートを見張っているのだ。

・・・というより、外からの侵入者はまさにこの二人のことだったのだが。

部屋に閉じ込められてからというもの、それ以来何の音沙汰もなくアギトのイライラは募る一方だった。

大人しくイスに座って、部屋の中を行ったり来たりウロウロするアギトを見つめて声をかける。

「ねえアギト、あの人たちが検査するって言うてからもう1時間以上経過してるけど・・・。

本当に何か人体実験とかされちゃうのかな？」

消極的で大人しそうな青い髪の少年、リュートが尋ねる。

テーブルの上にはクッキーの入った皿があったが、それに手を伸ばしたらアギトに止められたので食べることが出来なかった。

アギト曰く・・・毒が入っているのかもしれないという。
リユートが不安そうに尋ねて来るので、アギトはイライラするのをやめて同じようにイスに腰掛けた。

「よくわかかんねえけど、検査次第では拘束を解く・・・みたいなこと言ってたよな。」

・・・の割にあれから特に変わった様子もないし、もしかして実験器具の用意に手間取ってるのか？

とにかくそんな心配すんじゃねえよりユート！

オレ達は選ばれた勇者確定なんだから、検査が終わった後には晴れてあいつらはオレ達の下僕だって！」

何に対してもプラス思考なツンツン頭の少年、アギトがにかつと笑って励ます。

・・・と、その時だった。

ドアのカギを開ける音がして二人は一齐に振り向いて注目する。

遂に審判の時が訪れた・・・とでもいうように、ごくりとツバを飲み込みながらその場で固まる。

ギイツとドアが開くとそこには先程の金髪美女が現れた。

髪をきつちりとまとめしており、雰囲気はいかにもデキる秘書・・・といった具合だった。

ロングコートの下は軍人とは似つかわしくない軽装、大きな胸の谷間がアギト達の視線を釘付けにする。

丸い眼鏡を鼻にかけて、その女性はキリッとした表情のまま二人に話しかけた。

「検査の準備が整いました、長い間待たせてしまって申し訳ありません。」

では参りましょうか。」

案内されるまま二人は金髪美女の後をついて行く。てつきり実験室に行くまでの道のりを知られない為に目隠しされるのかと思っただが、その辺は随分とオープンだった。

緊張したまま回りの光景に目もくれずついていくリユートに対し、アギトはここが本当に異世界なのか珍しいものを発見する為に色々と目に焼きつけようと必死だった。

しかし回りは至って普通、確かに軍人の殆どが銃を携帯する・・・というより剣を装備している者が多かった。

その点では明らかに現代の軍人とは異なる点である、一昔前のドイツ軍ならば剣位装備しているんだろぅが・・・。

目的地に到着したのか、ドアをノックして中に入る。

すると中から消毒液や病院でよく嗅ぐ独特の臭いが鼻を突く、アギトはこの臭いが何となく好きだったが・・・。

中は誰がどう見ても実験室そのものであり、怪しい実験用具や何かのグロテスクなホルマリン漬けが棚にたくさん並んでいた。

色んな標本や解剖途中のグロイものを見つけたリユートは、顔から血の気が引いて行く。

何人が陰気そうな白衣を着た科学者達がこちらを奇異な目で見つめて来る、青い髪というものはこちらの世界でも珍しいのだからか。

物珍しそうに見られることに慣れていたアギトは、それでも不快な思いを抱きながら奥の方へとついて行く。

入った直後のような光景はなくなったものの、質素な病院みたいな場所に到着したアギト達はそこで白衣を着た先程の金髪に再会した。イスから立ち上がってまるで歓迎するかのように満面に笑顔を作る。そう・・・明らかな作り笑いを。

「やあ君達、では早速で申し訳ありませんが検査に入るとしましよぅ。」

中尉・・・カーテンを閉めてください。

それと君達はこれに着替えて。」

そう言つて渡されたものは、よく病院で検査をする時に着せられるような白い布切れだった。

これまで病院で大々的な検査を受けたことのない二人は、今着ているものをどこまで脱いだらいいのかわからない。

シャツを脱いで、そしてズボンを脱ぐのを躊躇われた時に金髪軍人が今更教えた。

「あ、下着は脱がなくても結構ですよ。

シャツとズボンだけ脱いだらその検査用の服を着てください。」

タイミングをわざと外したとしか思えない、そう察したアギトは白い目で睨みつけながらぶつぶつと聞こえない程度に文句を言っている。

検査服に着替えた二人は、金髪軍人・・・オルフェ大佐の言う通りに検査を始めた。

どうやら金髪美女・・・ミラ中尉はその補佐をしているようだ。

検査開始。

アギトはこんなことを想像していた。

ここは異世界・・・、きつとファンタジーらしく魔法の道具か何かで調べたりするんだろうと！

「では、早速血液採取と行きましょう。

腕を出してください。」

「・・・は？」

オルフェとミラは、普通に・・・。

ものすごく普通に注射器で二人の腕から血を抜き取った。
消毒液を含ませたガーゼを渡されて、針を刺した場所に押し当てる。
ミラがそのまま血液の入った容器を持って、どこかへ消えてしまっ
た。
ぽかぽかと呆気に取られる二人をほったらかして・・・、オルフェ
は次の検査に入り出した。

「それではこの握力測定器を利き手で持って、力一杯握ってください。
い。」

そう言っただけで手渡されたのは、これまた学校の体力検査などでよく見
かける握力測定器・・・そのものだった。

きよとんとしたままそれを握り締めて、何気なく視線でオルフェに
訴える。

しかし向こうも全く違和感なく・・・測定し終わるのを待っていた。

(あれ・・・？何か・・・何かが違うぞ・・・!?)

そんな風を感じながら、握力を測って・・・それをカルテらしき書
類に二人の測定結果を書き込む。

すると突然リユートが「あっ！」と大声を出した。

見ると・・・、ついさっき注射器を差した場所から血を噴き出して
リユートが慌てている。

冷静に別のガーゼに消毒液を含ませて、出血した部分を押し当てた。

「ああ失礼、そういうえさつき血液採取したばかりでまだ血が止ま
っていませんでしたね。」

失敗失敗・・・、あ・・・測定器の数値を見せてください。

おやおやこの数値はザナハ姫よりも低い数値ですねえ、どうやら
君は体力派ではないようです。

見てすぐわかりますけど・・・。

・・・はい、それじゃ次行きましようか。」

「ちよつと待て・・・、お前これわざと順番間違えたる。」

普通に考えて、血液を抜き取った後に握力検査なんてどう考えてもおかしすぎる。

アギトがそう指摘するも、オルフェは笑顔を作るだけで・・・軽くスルーされた。

「いいよアギト・・・、そんな大量に出血したわけじゃないから。」

「いや、普通によくねえだろ！」

アギトがそう反論するも、オルフェは淡々と次の段階に進む。

どうやら検査はまだ続くようで次に手渡されたのは、またも見たことのある物体だった。

細い棒に・・・、先端は丸い黒い物。

「さあ、今度は視力検査です。」

まずは左目を隠して、私が差したマークには穴が空いています。

穴が空いている方向を言うてください、では・・・まずはアギトからどうぞ。」

「ええくっく！？」

視力検査は二人とも2.0だった。

アギトはこの検査に不信感を抱き始めた、これは本当に自分達が勇者かどうか測る為のものなのだろうかと・・・。

検査はなおも続く。

体重を量り、肺活量を図り、・・・本気で普通の身体測定へと早変わりしていたのだ。

さすがのリユートも不審を抱かざるを得なくなる。

「ねえアギト、僕はこういったファンタジーの世界に詳しいわけじゃないから特に何も言わなかったけど。

これって普通の身体測定だよね？

至って普通の体力測定だよね？

体重計も何もかも、測定する道具は殆ど全部僕達の世界で見たものと特に変わりがないように見えるんだけど・・・。

異世界ってこんな感じなの？」

「・・・オレに聞くな。

オレだってお前と同じように違和感バリバリ感じてんだから。」

苦虫を噛み潰したように、不満一杯の顔になりながらアギトは込み上がって来る怒りを抑えているように見えた。

そんな二人の思いも全く気にせず、オルフェによる検査は続く・・・。

その後は体力を中心とした検査ばかりで、だんだん空腹になって来た二人には体力勝負の検査が厳しくなってきた。

フラフラになりながら、何とかオルフェが提示した課題をクリアして・・・遂に保健室のような部屋にあるベッドに倒れてしまう。

げえげえはあはあと息を切らしながら、二人が倒れているとオルフェは検査結果を全て書き込んだ書類に一通り目を通して満足そうに微笑んだ。

「資料は大体こんなものでいいでしょう。」

この検査結果を元に君達のステータスを計算します、お疲れさま

でした。

これで検査は終了なので、もう部屋に戻っても結構ですよ。ステータスの数値を割り出すのももう少し時間がかかりますから、それまで部屋で待機しててください。」

「待機って・・・、どうせ軟禁されるってことだろうが。」

どっちにしる総合結果が出るまでオレ達に自由なんてないんじゃないか。」

そう文句を言ってみても、ベッドにうつ伏せになってバテている状態では威嚇にもならない。リユートに至っては体力に自信がなかったせいも、文句の言葉すら発せられない様子である。

「まあそう言わずに。」

部屋に閉じこもっていても出来るだけ不自由しないように配慮させてもらいますから。」

それと、お腹がすいているでしょう？」

メイドに食事を運ばせますから、今しばらく我慢してください。」

礼節ある態度で接するが、どうにもアギトは素直に従えなかった。口や顔では丁寧に接しているようだが、その腹の中まで同じだとはとても思えなかったのだ。

しかし食事が出るのは今のアギト達にとっては願ってもないことである。

ここで更に文句を言って食事抜きにされる前に従っておいた方がいいと判断したアギトは、リユートを無理矢理起こして自分の服に着替える。

「そうそう、子供は素直が一番ですよ！」

本人に悪気がないのかもしれないが、言葉のひとつひとつが癪に障ってアギトはストレスが溜まって行くのを感じる。

着替えが終わるとどこからともなくミラが現れて、再び二人を案内した。

オルフェはこのままこの怪しい実験室に残ってステータスとやらを完成させるらしい。

「お疲れさまでした、それじゃ二人の部屋に食事の用意をさせてもらいますが・・・何か嫌いな食べ物でもありますか？」

「ニンジン！」

アギトはここが異世界であることを一瞬忘れて、思わず普通に嫌いな食べ物を告白した。

言った後に、ここが異世界であることを思い出して・・・どんな食材で料理されるのかが少し気になった。

続いてリユートも「納豆とかネバネバしたもの」と言うが、そもそもこの異世界に納豆があるのかも疑わしい。

当然、ミラは少し首を傾げていたが「ネバネバしたもの」という言葉だけを拾い上げて「わかりました」と答えた。

アギト達は元いた部屋に戻されて、そして当然ながらドアに鍵をかけられた。

入ってドアを閉めた直後だった。

そのあまりの素早さに、アギトは少しだけイラツとする。

だが・・・アギトがイラツとしたのは、ここに来てから殆ど全ての出来事に対して・・・だ。

「何か・・・、何かが違う気がするっ！」

異世界って言ったらもつとこう・・・、水晶玉とか・・・体内に眠る気とか・・・そういったものであって！」

綺麗な絨毯が敷かれた床に四つん這いになって、大げさに悔やむアギトを余所にリユートは物思いにふけっていた。

なかばここでの扱いに慣れて・・・そして諦めていたリユートは、この洋館に囚われるハメになった原因を思い出す。

窓から覗いた時に見た可愛い少女、姫と呼ばれた女の子のことを。

レシピ・2 「チェスのお見合い大作戦！」

春・・・それは気候が暖かく穏やかなせいか・・・気持ちも浮足立ってしまう季節でもある。

それはこの異世界、レムグランドでも例外ではなかった。

いつものように軍事訓練中であったチェスは、部下達に戦闘訓練を行なっている。

森の中での戦闘技術や魔物に対する対処法など、首都の軍学校では習わなかったことを教えているのだ。

そんな時、洋館の方から一人の兵士が走って来て大佐がチェスを呼んでいることを告げる。

「大佐が・・・？」

今すぐ来いつてか・・・、よしわかった。

おーいお前等！野外訓練は終わりだ！

今すぐ洋館の方に戻るぞー、遅れるなー！」

そう言うと、チェスは全員集合したのを確認すると20人程の部下を引き連れて洋館へと戻って行った。

ウィンチェスター・ヒューゴス、年齢は23歳、身長178センチ、体重72キロ、どちらかといえば筋肉質。

階級は少尉、趣味は拳銃マニア、嗜好はタバコ、飲酒は付き合い程度、見た目はチャラ男。

軍学校を首席で卒業後、オルフェからその才能を見込まれて推薦でこの第一師団に配属される。

オルフェ直属の部下、・・・ある意味幹部である。

重要な作戦には必ず参加し、上司だけではなく部下からの信頼も厚い。

その人懐っこくて人情家で兄貴肌なところが、人気の理由でもあった。

洋館に到着するや否や、チエスはタバコを携帯用の灰皿にしまいこむとすぐさまオルフェがいる執務室へと向かう。

軍服のポケットに両手を突っ込みながら歩いて行くと、地下室へ行く扉が開いて二人の少年が顔を出す。

アギトとリュートだった。

「よう、今回も来たな。」

「チエスじゃん！おっす！！」

「こんばんは、チエスさん。」

アギトとリュートが挨拶をする。

今日は金曜日、レムグラウンドで言うところのヴォルトデイだった。

「お前等、もうこっちの世界は慣れたか？」

気軽に話しかけて来るチエスに、アギト達はすっかり警戒心を解いていて今ではすっかりダチも同然だ。

「うん……、まだわからないことが沢山あり過ぎて混乱してるけど……生活のリズムとしては、慣れた……かな？」

リュートが答える、その横でアギトはムスツとした顔になってリュートとは正反対な回答をした。

「あのクソメガネが肝心なことを全っ然話しやがらねえからな、それ以外なら問題ねえよ。」

チエスは苦笑しながら、そのまま「じゃ！」と言って別れた。

(クソメガネ・・・、あいつだから言える言葉だな。)

仮に自分達の誰かがそんな暴言を口にした日には・・・、想像しただけでも全身を業火で焼き尽くされそうな気持ちになる。恐ろしくてそれ以上の想像が出来ない、例え酒の勢いを借りたとしても・・・口が裂けても、決して吐けない言葉であった。

オルフェの執務室に着いて、ドアをノックする。

中から「入れ」という返事が聞こえると、チエスは「失礼します」と言っただアを開ける。

入ると、そこにはいつもオルフェの右腕として控えているミラ中尉の姿がどこにもなかった。

中尉がいないということは、任務とかそういった仕事の話ではないのか？と推察する。

オルフェはいつものオートスマイル全開で、中に入るように合図した。

「お呼びでしょうか、大佐。」

敬礼して、言葉を待つチエス。

しかし返って来た言葉は、とても意外なものだった。

「今日お前を呼んだのは他でもない、実は頼みたいことがあってな。」

「・・・はあ。」

チエスは何気に嫌な予感がした、オルフェの頼みを聞いて無事だった記憶がない。

「お前、見合いをする気はないか？」

唐突な切り出し方に、思わずチエスは本音が出てしまった。

「それは・・・、大佐のお下がりではないですよね!？」

ふっ・・・と笑みをこぼすと、オルフェは否定した。

それだけが一番の気がかりだったチエスが、つい素直に安堵してしまっ。

「いくら私でも自分が手を付けた女性を、部下に紹介するわけがないだろう。」

実はさる名家の令嬢がお見合いしたいと言いだしてな、ルミナス將軍の一人娘なのだが・・・。」

最後まで聞かずとも、チエスは自分がスケープゴートにされることを見抜いて肩を落とした。

「勘弁してくださいよ大佐く・・・、その縁談ってつまりは大佐のところに来たやつでしょ？」

自分が結婚する気がないからってオレに回すことないじゃないすか・・・。」

「まあそう言うな、他に紹介したい人物がいると言ったら本人もなぜか納得してな？」

適当に送った写真の中から相手が厳選な審査を行なって、お前が選出されたんだよ。

向こうが乗り気で選んだんだから一方的にフラれることもない、確かお前も彼女が欲しいって言ってただろう。

いい機会じゃないか？」

そう言われて何だか釈然としないまま、チェスは渡された相手のお見合い写真を受け取った。

「……だからって、人のことをまるでオーディションするみたいな扱いはどうかと思いますかね……。」

「つかまさか履歴書にあった写真を勝手に送ったんすか!？」

「それこそ勘弁……。」

そのままチェスの思考は停止した。

お見合い写真を握り締めながら……、フルフルと小刻みに震えている。

「どうだ、なかなかの美人だろう？」

「お前にはもつたない位だ、家柄も容姿も申し分ない。」

チェスは大量の涙をこぼしながら、感激で言葉もない様子だ。がっしりとオルフェの手を掴んで固く握りしめる。

「大佐……っ、ものっそ好みっす!!」

「それじゃお見合いは決定、だな。」

来週、早速お見合いをすることになったチェス。

返事をすぐさま送ると、どうやら相手の方がこの洋館へ訪れるらしいことがあった。

その間……、チェスは相手の女性のことで頭の中が一杯だった。

そして遂にお見合いをするノームデイ、相手はすでに到着していたが出迎えはオルフェが行なっていて……チェスはまだ

顔も合わせていない。

オルフェ曰く、正式な場でお互い初めて出会った方が良い……という趣向のせいだ。

緊張してきたチェスが駆けこんだ先は、なぜかアギト達の部屋だった。

「なんでオレ達んとこ来てんだよ……。」

アギトとリユートはチェスのお見合いの話をメイド達から聞いていたのだが、チェスをからかいに行くのをオルフェから禁止されていて部屋から一步も出ることが出来ずにいたのだ。

「確か相手はもう来てるんですよね……、早く食堂……じゃない、お見合い会場に行った方がいいですよ！」

そう促すリユートに、チェスは相当緊張しているのか……思考回路がめちゃくちゃになっている様子だ。

懇願するようにアギト達の前に土下座をすると、とんでもないことを頼んできた。

「頼むっ！」

オレが緊張で失敗しない為に、お前達も付き添ってくれないか！？

てゆうか相手のプロフィールに『子供好き』って書いてあったか

ら、そのポイント稼ぎでもあるんだけど……。

お前達を連れて登場すれば、オレが子供好きだつてアピール出来るし・・・第一印象としても悪くない！

だから一緒に来てくれ！大佐にはオレから後で弁解しとくから！
「！」

当然、自分達をダシにされるのはあまり気分の良いものではなかったが・・・他ならぬチェスの頼みとあつて、アギト達は引き受けた。余所行きの綺麗な服は持つてきていないことを告げたが、アギト達が異世界からきた戦士だという肩書きさえあれば衣装なんて気にしなくてもいいとチェスは言う。

渋々ながらもアギト達は、一緒にお見合い会場・・・部下やメイド達が生懸命デコレーションした食堂、新設・合コン部屋へと向かった。

食堂の扉の前でミラが待つており、チェスの両脇にアギト達がついてきて眉根を寄せるがチェスが苦笑しながら手短に説明する。

溜め息をつきながら、粗相のないようにと・・・それだけ忠告して・・・扉が開かれる。

食堂の席に座っているのは、お見合い相手本人とその付き人一人、そしてオルフェが座っていた。

ぎくしゃくとした仕草で近寄ると、写真で見たよりも・・・もっとならずと綺麗だった相手に思わず鼻の下が伸びる。

美しい栗毛に軽くウェーブがかかっており、薄い緑色の瞳、白い肌、とても華奢で・・・ちらりとドレスの隙間から見える鎖骨に頭がクラクラしてくる。

「初めまして、メルシーと申します。」

可愛らしい声に、もはやチェスは気絶寸前だった。

しばらくオルフェ達も付き添っていたが、あとは若い二人にお任せして・・・と退室してしまった。

会話の殆どはオルフェが取り仕切っていたので、会話をリードする人物がいなくなつて途端に不安が増すチエス。

それでもチエスは、テーブルの下でアギト達の手を決して離さなかつた。

「あの・・・、それであなた達は仲がよろしいんですの？」

首を傾げながら、メルシーがアギト達に質問した。

「おう、オレ達親友同士なんだ！」

「チ・・・、チエスはとっても優しいし頼りになるから・・・っ！
ね？アギト！？」

慌ててチエスの株が上がるように気を使うリユート。

乾いた笑いをもらしながら、チエスの緊張はすでに限界に近かった。それを見かねたアギトが、小声で注意する。

「チエス！お前緊張しすぎだつて！！」

そんなんじや相手も気を使って疲れさせちまうだろうが、もっとこつ・・・何か話題でも振れよ！」

「あ・・・ああ。」

ところでメルシーさんっ！？」

「なんですかチエスさん？」

（・・・超ド級に可愛すぎるんですけどおーっ！っ！）

・・・と、心の中で感動の涙のガッツポーズをしながらチエスは何とか懸命に話題を振った。

なんとなく空回りしながらも、相手の笑顔からしてまず大丈夫だろうと思っただアギトは次のデート場所にクレハの滝を提案する。

「おい・・・、でも外には魔物が・・・！」

外に出るのは危険だと判断したチエスが制止するが、そんなチエスの手をそつと取ったメルシーが寄り添うように笑顔で見つめる。

「私のことは、チエスさんが守ってくださいるんですよね？」

「勿論ですつ！」

このウィンチエスター、命に代えましてもメルシーさんの安全を確保いたします!!」

「・・・こいつバカだな。」と、呆れ顔のアギト。

こうしてチエス達は外出許可を願い出た。

ミラに説明して協力してもらおうように頼むと、メルシーに気付かれない程度に回りを警備する・・・ということとで和解した。

これでお役御免・・・と思いきや、チエスは涙ながらに一緒について来るように言ってくる。

まあ確かに回りで警備すると言っても、メルシーの目の前に魔物が大量に現れた場合チエス一人では確かに危険だった。

「でも肝心な場面ではチエスが一人で倒さないと意味ないからね？
女つてのは、自分を守ってくれる強い男の人に惹かれるものなんだから・・・。」

同じ女の立場として、ザナハがアドバイスした。素直に受けるチェスに対して、またアギトが余計なことを口走る。

「お前の場合は、男が守らなくても平気そうだな……。」

キツと睨まれたが、メルシーが来たのでアギトはアツカンベーをしながら逃げていく。

メルシーの歩幅に合わせて歩いて行くチェス達。

この調子だと日が暮れそうだ……と思いつつ、そんなことは死んでも言えないと思った。

二人の前を歩いて行くアギト達を見て、メルシーが羨ましそうに呟いた。

「チェスさん……、本当にあの子達と仲がよろしいんですね。

羨ましいです、あたしの回りには普段メイドしかいないので……小さな子供達と触れあう機会がないのです。

子供って……本当に可愛いですよね、元気があって。」

「……そう、っすね。」

子供が可愛い？面倒を見るのはものすごくしんどいことだぞ……と、チェスは心の中で本音を叫んだ。

決して嫌いなわけではないが、幼い頃に子供の面倒をよく見ていたこともあって……その時の悪夢が蘇るようだった。

そんな時、目の前でアギトが張り切り過ぎて転んでしまう。

急いで駆け寄ったりユートは、アギトの膝を見て少しすりむいているだけだと安心していた。

「おい、怪我でもしたのか!？」

慌ててアギトに駆け寄った時、後ろの方で何か聞こえた気がした。振り向くが、メルシーに特に異変がなかったので・・・気のせいかと、チェスはアギトの傷口に・・・万が一の為に持ってきていた携帯用の医療パックを取り出して簡易的な手当てを施す。

「きゃあっ!!」

メルシーの悲鳴にチェスは心臓がひっくり返りそうになって、慌てて立ち上がる。

目の前にちっさいスライムが威嚇していたのだ。

「魔物かっ!!」

スライム程度だったら造作もない、チェスはピストルでスライムを撃つと元々HPの低かったスライムはすぐに消滅した。

だが・・・、草陰から次々スライムが出てきて回りを取り囲む！チェスはメルシーをかばいながら銃を構えた、アギト達は遂に自分達の出番だと戦闘開始する。

自分を守る為に男性が一生懸命かばって戦ってくれている・・・、メルシーは頬を赤らめながらじっと見つめていた。

(やった!これはかなり好感度アップしてるぞ!!)

戦いながらチェスは心の中でガッツポーズを決めていた。

次々現れるスライムを次々倒していった時、突然・・・メルシーに異変が起きた。

魔物と戦っているチエスはそのことに気付かなかったが、全ての魔物を倒し終えた時・・・異変に気付く、イヤでも。

「ち・・・、超・萌えーっ！！」

突然の奇声に、アギト達は呆然とする。

見るとメルシーは両手を胸の前に組むと、瞳をハートマークにさせて・・・チエスではなくアギト達を見つめていた。

「男の子同士の友情・・・、いえ・・・愛っ！

萌える・・・萌えるわっっ！！

やっぱり男の子同士の危険な愛は、萌えの対象よねっ！！」

石のように固まったチエスは・・・、目が点になりながら今自分が見ている光景に自問自答している。

アギト達に駆け寄ると、メルシーは色々と卑猥な質問を繰り返していた。

「もう我慢出来ないわ、あなた達・・・寝る時も一緒なの！？

その時はどっちが攻めで、どっちが受け！？」

やっぱり回りには、二人の関係を秘密にしているのよね！？」

一人できゃーきゃー騒ぐメルシーに、誰一人としてついて行けず・・・

・呆然と立ち尽くす。

ひくひくとうっとうしそうな顔になりながら、アギトは一言・・・メルシーの本性を言い当てた。

「・・・こいつ、俗に言う腐女子かよ。」

その後、傷心のチエスの方から縁談を『お断り』したのは言うまで

もない。

追加報告。

オルフェがお見合いを断わった時、数名の部下のプロフィールを送った。

ルミナス家の執事と本人とで厳選な審査を行なう際、メルシーからある条件を言い渡されていたのだ。

それは、特殊な趣味を持っていること。

最初オルフェの方に縁談の話がいったのも、自他共に認める特殊な趣味のせいであった。

メルシーは特殊な趣味を持つ相手ならば、きっと自分の趣味も理解してくれるに違いないと思ったのである。

チエスは趣味の欄に、「拳銃マニア」と書いていた。

きっとメルシーは、「マニア」という単語しか目に入らなかったのだらうと・・・そう推察するしかなかった。

レシピ・3 「登場人物紹介・アギト編」(前書き)

サイロン「今回は趣向を変えて、登場人物の紹介コーナーを設けたぞ！」

アギト「……って、何でサイロンが司会なんだよ。」

リユート「物語の中で一番テンションが高くて、一番おしゃべりだから」

「じゃないのかな？」

サイロン「では、まずは物語の主人公から紹介するのがセオリーとなっておるが……」

困ったことにこの小説では、お主ら二人が主人公じゃからのう……」

二人一緒に紹介するわけにはいかないんじゃが……」

アギト「だったら普通にジャンケンで決めたらいいじゃん。

勝った方が、先に紹介される。」

真の主人公として！」

リユート「え〜？ 作者の意向じゃ第1部は僕が主人公の

はずなんじゃないの？」

アギト「勇者役を否定したお前が言う権利は、ないっ！

ほれ、ジャンケンいくぞっ！？」

ジャ〜ンケン〜ン……」

アギ&リユート『ポンっ！』

アギト「やりい〜っ、オレの勝ちいつ!」

リユート「あゝあゝ。。。」

(でも、一番最初ってのはちょっと抵抗あるし

これでいつか。。。)

サイロン「ん？ 決まったようじゃな。

では第1回キャラクター紹介の一人目は、

レムグランドの光の戦士、アギトじゃ!」

アギト「おう！ これでオレのファンが増えるってモンだぜ!」

サイロン「。。。それはどうかのう。」

レシピ・3 「登場人物紹介・アギト編」

名前

六郷アギト^{りくまう}

誕生日

4月10日

年齢
(点で)

12歳(本編「ツインスピカ」第1部の時

血液型

B型

種族/身分・階級

日本人/小学6年生・光の戦士

身長

138センチ(本人非公認)

髪の色/瞳の色

青/青

基本属性/マナ指数

火・光/880

趣味

テレビゲームやネットゲーム、冒険モノやファンタジー系の小説やマンガ・アニメの

観賞。

好きな食べ物
レーライス。

にんじんなし(もしくはすりおろし)の力

嫌いな食べ物

にんじん。

利き手/使用武器

右利き/剣

好みのタイプ

柴咲コウみたいな綺麗なお姉さん。

嫌いなタイプ

偉そうな態度をした大人。

好きな色/嫌いな色

青/どぎついピンク

好きな動物
そうだから。

犬、特にシベリアンハスキー。大きくて強

嫌いな動物

ゴキブリ、素早い上に飛んで来るから。

長所
い方。

基本的にポジティブ思考。逆境には割と強

短所

自己中心的で、まず人の話を聞かない。

性格
にはとことん

元気で明るく前向きだが、心を許した相手

ワガママ全開になる。

家族構成

父、母、アギトの三人家族。

に帰らない。

現在、父親は海外出張中。母親は滅多に家

家柄

貿易会社の社長の息子。

親しい人物

親友のリユート。

師事する人物

オルフェ。

戦闘タイプ

典型的な前衛戦士タイプ。

防御力)の

HP (生命力) ・ AT (攻撃力) ・ DF (

高さは、ジャックの次に高い方。

魔法防御力)の

しかし、MAT (魔法攻撃力) ・ MDF (

低さは致命的。

は出来るが、

火・光属性の魔法をそこそこ習得すること

ATが低い為に

そのどれもが攻撃系ばかりで、基本的なM

期待は出来ない。

れないように

なお、回復系や補助系の魔法は一切覚えら

なっている。

サイロン「・・・以上がプライベートな内容以外、全て初期の精密
検査により

判明したデータじゃ。」

リユート「・・・って、殆どプライベートなプロフィールじゃない
ですか。」

サイロン「仕方なからう、グリムからもらったデータには数字しか
記載されて

おらんかったからな。

そんなモンを見て何が面白いというのじゃ、何が楽しい

というのじゃ？

しよーがないから、余がチヨチヨイつと趣向を凝らしてみた！

本人を問い詰めて聞いた内容じゃから、正確な仕上がりじゃぞ。

QCDを守るプロ根性の為せる業^{わざ}じゃー！

リユート「え……？ QC……D……!？」

サイロン「Qとは、クオリティ（品質）！

Cとは、コスト（費用）！

Dとは、デリバリー（納期）のことを言うのじゃ！

商売人ならこれ位知っておいて当然じゃぞ、小童よ。」

リユート「なんか、も……どうでもいいです。

そんなことより、これが第1回目のキャラクター紹介になるんですけど。

基本的には何をするんですか？」

サイロン「うむ、基本的には紹介したキャラクターについて各国の著名人や関係者に

集まってもらい、とことんその紹介人物をなぶる……じゃなく。

どういった印象を持っているのか、色々と裏話を聞こうと思っておるぞ。」

リユート「今……、なぶる……って……?」

サイロン「では、早速始めようとするかの！

まずはレムグランドからじゃー！」

リユート「ちょっと待ってくださいよ！」

えっ!?!? これってそういうコーナーなんですっか!?!?」

くレムグランド編く

サイロン「では、早速アギトの本拠地であるレムグランドで色々話を

聞いて行こうとするかのう!

集まってもらったのは、以上の面々じゃ。

ほれ、順番に挨拶していくがよい。」

ザナハ「・・・何これ、名前を言っていたらいいわけ?」

ミラ「多分そうだと思いますけど・・・?」

オルフェ「まあまあ二人とも、どうせ記事には名前が表記されていますから

難しく考えなくても適当にしていればいいんですよ。」

ジャック「そっぴやお前、首都の某有名雑誌のインタビューやら何やらで

取材慣れしていたな・・・。」

チエス「あ、それオレも見ました!

『首都の王国騎士、人気ランキング!』とかっすよね!?!?」

グスタフ「大佐、別に騎士じゃないのにな・・・。」

ドルチェ「異例の首位獲得、ジャンルが違うにも関わらずランクインして

即殿堂入りした……。」

アシュレイ「全く馬鹿馬鹿しい、市民はそういうのが本当に好きだな。」

ミア「あら〜？

でも最新号を見たら、今現在首位を獲っているのは『謎の黒衣の剣士』

になってるわね〜。

テーマをまるっきり無視した趣向は、今も昔も変わらないみたい。」

サイロン「……というわけで、以上の面々にアギトについて語ってもらおう

ことにしようかの！

第1回ということ、多少のぐだぐだ感を感じないでもないが

気にせずサクサク行くのじゃ！

そうじゃのう……、ここにいる人間は皆アギトとの面識があるし

面白い話などが詳しく聞けそうじゃ。

まずは光の神子から行こうかの！

姫よ、お主はアギトについてどう思っておる？」

ザナハ「下品で口が悪くて全く好感が持てない不良少年かしら？」

いっつもだぶだぶのだからしない格好してるし、正直言っていっつが光の戦士じゃなかったら、一切接触することなく

過ごしてたわ。」

サイロン「なるほど、姫は随分な照れ屋さんに見えるのう。」

本当は気になるのに本当の気持ちを言えない、クラス委員長と不良少年。

・・・といった関係じゃな。」

ザナハ「なんでそうなるのよ、てゆうか後半意味がわからないんだけど？」

そんな知識どこで得たわけ。」

サイロン「では次！ 師匠であるグリムから。」

オルフェ「特にありません。」

サイロン「では次！ ジャック。」

ジャック「おいおい・・・、このコーナーそれでいいのか!？」

サイロン「うる覚えではあるが、グリムはアギトに対しての印象がある程度

本編でクソミソに発言しておったはずだから、いいんじ

ゃよ。」

ジャック「まあいいか・・・。」

そうだな、改めて聞かれると難しいが、とにかく明るくて元気な

いい奴だと思っぞ!？」

ザナハの言うように確かに口は悪いかもしれんが、一部

の読者には

それが好印象だったりするしな。」

サイロン「なんじゃつまらん、このコーナーでは裏話を期待して
おると」

言うのに……。

誰かアギトに関するとおきの恥ずかしい情報とか、
持って

おらんのか!？」

チエス「はいはい！ オレ、結構いいネタ持ってると思うんですけど
！」

サイロン「ほう！ では話を聞こうかの！」

チエス「実はアギト達とは洋館で、それなりにダベったりしてるん
すけどね。

その時にアギトの奴……かなりのボイン好きであること
が判明

したんすよ。」

ザナハ「うわ、最悪！ キモっ！」

オルフェ「それはお前のことだろう……。」

チエス「あっ、大佐！ みんなには内緒にしてって言ったのにつ……
と……とにかく、妙にアギトの奴が中尉の胸元ばかりに

視線が

いつてたのに、これで合点がいきましてね……。
中尉、これからアギトには気を付けた方がいいですよ!？」

ミラ「ええ、少尉にも気を付けるようにしますね。

教えてくれてありがとう。」

チェス「ぐっさーっ！ 大佐のせいで墓穴掘ったー！！」

グスタフ「でもそれって普通じゃね？・・・男なら。」

サイロン「そうかの？ 余はどちらかといえば、程良く手の平に収まる位が

好みじゃがのう・・・。」

ジャック「あ、奇偶だなあ！ 実はオレも・・・。」

ミラ&ミア『一体何の話で盛り上がっているんです・・・！？』

男性一同『すみません』

サイロン「・・・他に恥ずかしい暴露話はないかの？」

オルフェ「そうですね・・・、あまり思い出したくない記憶ではありますが

以前『静止世界』で過ごした時の話があるんですけど・・・

・・・」

ドルチェ「大佐とアギトはその世界で、約半年二人きりで過ごした・・・。」

サイロン「ほう、一体どんな話じゃ？」

オルフェ「いえ、大したことではありませんよ。」

まずは本編を読破なさってる読者なら、当然の知識ですが……。

朝に弱く、特に目覚めてから約1時間は機嫌が最悪の状態になる。

食事スピードが尋常じゃない位、早い。

料理が出来ない。

あの性格からは考えられませんが、意外に綺麗好きのよう
うでマメに

掃除をしますね。」

サイロン「なんじゃ、案外普通の内容ではないか……。」

オルフェ「いえいえ、本番はこれからですよ。」

大浴場に入った時、まあ……まだ子供ですから仕方ありませんが

恐らく皆さんが想像していた以上に……。」

ザナハ「わぁーっ！ 何の話をしてんのよっ！

そんなことこんな所で言う内容じゃないでしょっ！？

てゆうか聞きたくないしっ、全っ然興味ないしっ！！」

グスタフ「ああ……、あれっすよね！？」

オレもちらつと見たけど、アギトの奴……。」

ザナハ「やめろっつってんでしょ……！」

がっしゃあーん！ ばきばきばきいっ！ がごーん！ ぐしゃ……。

サイロン「……姫が暴走した為、これ以上のインタビューは決行

不可能と

なつたのじゃ。

レムグランド編はここまでにして、次はアビスグランド編へ突入！」

くアビスグランド編く

サイロン「では、始めるとしようかの。

アビスグランド編では、アギトと面会した人間が少ないということも

あるのでプロフィールと写真を見せながら話を聞こうと思う。

ルイド、ヴァル、ブレア、フィアナ、ゲダック、ジョゼ、そして

ベアトリーチエじゃ。

まずは面白い話を聞けない面々の話から聞いて行くこととするかの。

ほれ、これが光の戦士じゃ。」

ベアトリーチエ「ふうん……、随分と生意気そうな顔つきじゃな。

初めて会った頃のルイドを思い出すようじゃ。

しかし……まだまだ子供、興味はないな。」

サイロン「いや、別にお見合い写真とかじゃないんじゃないの……」

ジョゼ「これが光の戦士……、闇の戦士によく似てる。」

ゲダック「ふん、ワシも興味がないのう。 故に話すことは何もない！」

ヴァル「オレもあまり接点がないからな……、サイロン殿の望むような

話は出来そうにない。」

ブレア「同感だわ。

そもそも本編が遅筆な上に展開が牛歩的だから、このタイミングで

こんな企画を立ち上げる方がどうかしてるわね。
へたなことは言えないし……。」

ファイナ「ここに来た時点で問題があるんじゃないかしら？

大体あたしはお兄様の紹介の時に出了たかつたんだけど、
どうして

こいつが一番最初なわけ。」

サイロン「この奴らは冷たいの……、一応印象だけは聞いておこうと

わざわざ立ち寄ったというのに。

大体来なかつたら来なかつたで、お主らキレるじゃろう
が。」

ジョゼ「印象……。」

そうね、何だか青い瞳の奥に……強い意志のようなものが
感じられるわ。

決して折れない心、諦めない気持ちが表れているよう……。
」。

ブレア「……でも所詮はレム側の人間、語ることなど何も無いわ。」

ヴアル「いい加減にしないかブレア、サイロン殿にも失礼だろう。」

まあ……、あのグリムに弟子入りしている位だ。

相当な根性を持っていることだけは、確かだな。

実際のところは、剣を交えてみないとハッキリしないが……

「。。。」

ゲダツク「ふん、野蛮な奴め。」

武器を交えなくとも、秘められた魔力を探れば強さなど容易に

わかるわい。

mana指数の割に魔力が低すぎる、これじゃ話にもならないな。」

フィアナ「でも、いたぶり甲斐はありそうよ？」

こっぴどく奴を拷問したら、いい声で泣いてくれそう。」

サイロン「なかなかいい話が出て来んのう……。」

どうじゃ、ルイド？

さつきから黙っておるが、何かコメントはないのかの？」

ルイド「オレか？」

そうだな……、光の戦士について感じたことなら本編で

少し

語っていたが。

ジヨゼの言うように、こいつはどんな苦境に立たされよう

とも

決して諦めない根性を持っているのは確かだな。

それに・・・、絶対に仲間を見捨てない心を持っている。
敵に回せばこの上なく恐ろしい存在に成長することだろう。」

サイロン「お？ 随分と過大評価じゃな。」

「どうやらルイドはなかなかアギトのことがお気に入りのおうじや。」

「では、これ以上ここにいってもこれといった収穫はなさそうなので」

「アビスグランド編はこれにて終了とするかの！」

ベアトリーチェ「ところでルイドの紹介は、いつになるんじや!？」

サイロン「では、次なる舞台はミズキの里じや！」

「ミズキの里」

サイロン「ここもアギトについての話は期待出来んから、サクっといこうかの。」

イフォン「光の戦士について話せばいいんですか？」

「そうですね・・・、負けず劣らずの馬鹿っぷりってのは断言出来ますよ。」

ハルヒ「お前、一体誰と比較して断言しているっ!？」

メイロン「妾はな、妾はな! こやつのこと気に入っておるぞ！」

「レムグランドの首都で、兄様を助けた人間じゃからな。」

サイロン「なんと!? 余はアギトが義弟になることなど認めんぞっ!?!?」

イフォン「てゆうか、誰一人として認めるつもりありませんよね。

重度のシスコンぶりは、レムグランドの王子といい勝負ですから。」

く再びレムグランドく

アギト「なんじゃこの体たらくぶりわ……。」

サイロン「いや、メイロンの婿候補について熱くなり過ぎてのう!

お主に関する話を聞くことが出来なかった、すまんすまん。」

アギト「じゃなくて……、ロクな話題ねえじゃんか。

何だよこのぐだぐだ感わ!?

第1回目に輝いたオレが恥ずかしいわっ!」

リユート「そうだよね……、あとのキャラに至っては本編との絡みを

考えたら、もはやパロディとしてやってくしかなさそうだもんね。

ネタバレしない程度に……。」

アギト「っーか、完全にネタバレそのものじゃん!

本編との折り合い考えて・・・とか、そういったレベルじゃなくなつて

きてるじゃん！

何？ 何でちゃっかり『ぼいん好き』明かしちゃってんだよ！

もろ恥ずかしいわ！ ミラとの会話シーンでオレが常に、胸にばかり

視線が行ってるように感じるわ！

リユート」でも・・・、本当のことだしね。

結構ミラさんの胸元に釘付けになつてるシーンとかあつたし。」

アギト「やめるおおおおおーっつっ！

これ以上オレのイメージをぶち壊すのはヤメろおおーっつっ！」

リユート「アギトはまだいいよ、僕なんか次回紹介されるのが怖いんだから。

インタビューの時には本人交えないで勝手に話をされる上に、

結局最終的にはそれを全て聞いた状態で締めることになつてるし。

何言われるかわかったもんじゃないよ・・・。

あ、胃が痛い・・・。」

サイロン」では、今回は自分の噂がとっても気になるリユートじゃ！ キャラクター紹介のコナーは不定期に挟む形になるが、

基本的にはエピソード集であることを、忘れぬように！

ぞ！」

以上、進行役として龍神族代表のサイロンがお送りした

レシピ・3 「登場人物紹介・アギト編」(後書き)

遂に勝手に始めてしまいました、登場人物紹介。これで少しでも各キャラクターに好感を持つてもらえたら、幸いです。

サイロンが紹介したように、次回はリユートを予定しております。

何か読者様の方からリユートに対して質問がありましたら、ぜひとも紹介させていただきます。

レシピ・4 「オルフェの華麗なる日々・前編」(前書き)

久々の日常編。

今回の話のタイミングとしては本編で言うところ、イフリートとの契約より少し前位になります。

レシピ・4 「オルフェの華麗なる日々・前編」

アギト達がレムグランドで生活しているこの洋館には、実に様々な施設が揃っている。

未だ本編でも語り尽くされていない施設が多数存在しており、この洋館にはまだまだ謎が多い。

その中でも、ヴィオセラス研究員しか出入りが許されていない実験室での・・・ある事件について語るとしよう。

それは、オルフェがいつものように実験室で・・・趣味に明け暮れていた日のことだった。

基本的にオルフェが趣味である実験をする時は、必ず全員に退出命令が出てしまう。

彼が作る物がとても危険だから・・・というのが一番の理由だが、出来上がった物がそのまま門外不出の禁書・禁術に部類されるような特A級扱いになるものばかりなので、その調合法を誰にも知られないようにする為でもあったのだ。

今回も怪しい材料、そして怪しい煙を巻き上げながら・・・鼻歌交じりに調合する。

いつもなら・・・、このままたった一人で新薬を完成させて・・・レシピを封印するところであった。

その時、事件は起こった。

どぉぉーんっっ！！

洋館全体を揺るがす程の爆音、衝撃、振動が実験室を襲う。

がちやがちやと辺り一面に薬品の入った瓶や、実験用具が床に落ちて割れて・・・そして飛び散る。

「しまつ・・・！」

予想もしてなかった出来事に、オルフェは先程完成させたばかりの・・・衝撃によって気化した新薬を不覚にも全身に浴びてしまったのだ。

咳き込む声だけを残して・・・、実験室は気化した新薬による煙で充満していく・・・。

オルフェが趣味に耽って、約2時間が経過しようとしていた。いつもなら小1時間程で満悦そうに出て来るオルフェだったが、今日に限っては随分遅いと感じたミラが不審に思う。

「そういえば・・・、さっきアギト君達の修行によるダメージが洋館全体に現れていたけど・・・。」

その時、まさか実験中だったなんてこと・・・。」

嫌な予感がしたミラは、急いでオルフェがいるであろう実験室へと向かった。

走って行き、すぐさま実験室のドアにかけてあるメッセージボードに目をやる。

『趣味満喫中、入室禁止！』

「・・・『実験中』でも『開放中』でもない。

やっぱりまだこの中にいるみたいですね・・・。」

ひとまず中の状態を探る為に、ノックを試みる。

そのまま返事が聞こえてくれば無事ということになるが・・・、し

かし一向に返事は返って来なかった。
中がどんな状況なのか全くわからない以上、すぐさまドアを開ける
ことも躊躇われた。

なぜなら・・・もし危険な薬品が室内に充満していたとして、ドア
を開放したせいで洋館全体を危機に
さらすわけにはいかないからだ。

「大佐・・・大丈夫ですか!？」

何も問題ありませんか!？・・・大佐っ!？」

しばらくすると・・・、ようやく返事が返って来た。

「大丈夫です、少し煙を吸い過ぎてしまって・・・むせて返事が出
来なかつただけですよ。」

今ドアを開けますから・・・。」

返事を聞いて、ミラは不可解な表情になった。
眉根を寄せて先程の返事が一体誰のものなのか、石のように硬直し
ながら懸命に頭の中の記憶を探っている様子だ。

「ち・・・、ちょっとお待ちください!？」

大佐は中にいるんですよね!？・・・さっき返事をした子供は
一体誰なんですか!？」

ガスですか!？メタンガスを吸って声が高いだけですか!？
・・・本当に大丈夫なんですか!？」

少し焦った口調でドアに向かって懸命に声を張り上げる、その光
景をたまたま廊下を歩いていたジャックが見つけた。

ミラが慌てる様子を、もう長い間見ていないこともあって・・・物
珍しそうに見つめながら声をかける。

「どうしたミラ？」

なんかパニックってるみたいだが……、実験室で何かあったのか！？」

突然声を掛けられて少し驚いたが、すぐに気を取り直してミラがある程度説明する。

……といっても、ミラ自身にも一体何が起こっているのかわかっていない状況なのであまり説明にもならなかった。

「どうやら相当焦っているみたいだな、ミラが意味のない説明をしますとは……。」

そんな時……、ぎいっとドアが開いた。
独りで。

ぎよっとした二人が実験室の中を覗き込むが……、少し実験用具が床に落ちて割れたりしているだけで……それ程ひどい状態にはなっていない様子だった。

少しだけ……わずかに残っていた煙のようなものが、床を這っているだけだ……と、視線を下に落とした瞬間。

二人は目まいがした……、ひくひくと片目を痙攣させながら……すぐ目の前の事実視線を背けたくなっている。

「……なんですか、随分と大袈裟ですね。」

ダブダブになった軍服を引きずったまま、背中程まである金髪を片手で払いのけ……フンと鼻を鳴らした

8歳位の少年が、ミラとジャックの目の前に立っていた。

長すぎる袖を肘まで折って……、眼鏡を拭きながらサイズが合うかどうか確認をしている。

呆然とする二人・・・、もはやこの少年に対して何と声をかけて良いのかわからないでいた。

「何を二人して呆けているんですか。」

そんなことより中尉、申し訳ありませんが至急私の私室に子供サイズの服を一着用意してください。

何なら別にリユートの私服を借りて来ても結構ですよ、きっとアギトの私服ではサイズが小さいでしょうからね。」

今のでハッキリした・・・と言わんばかりに、二人は稲妻にでも打たれたような強い衝撃を受けて・・・驚愕した表情になる。

「い・・・、今のイヤミはまさしくオルフェのもの！！ 間違いないっ！！」

どうしたんだそんな愛くるしい姿になっちまって！！」

「まさかさっきの振動のせいで、誤って実験に失敗でもしたんですかっ！！？」

外見による面影はそっちのけで、いつものように発したイヤミな台詞で認識されたことに・・・少し不満そうなオルフェであった。

「・・・なんですか、その認識の仕方わ。」

まあ別に構いませんけどね、そんなことより中尉？」

小さな子供に促されて、ミラは複雑にも敬礼をしてからすぐさま走り去ってしまう。

複雑そうな・・・面白そうな表情を浮かべたジャックに、オルフェはあからさまに不快感な顔をした。

そこには、沈黙が支配していた。
いや、正確には笑ったら負け・・・というにらめっこが繰り広げられていた。
ひくひくと・・・一番最初に敗北してしまいそうなアギトが、口の端に現れそうになっている笑みを懸命にこらえながら尋ねる。

「・・・で？」

間違つて実験中の薬品を自分で浴びて・・・、こんなちっさいガキになつちまつたと！？

あの天下のオルフェが？

あの天才のオルフェが？

あの天上下唯我独尊のオルフェが？

あの偉い科学者でもあるオルフェが？

あの凄い大佐様でもあるオルフェが？

あの人を小馬鹿にしたオルフェが？

あの・・・っ。」

「やめてくれないアギト？

イヤミが念仏みたいに聞こえてきて、夜眠れなくなっちゃいそうだから・・・っ！」

両手で耳を押さえながらアギトのイヤミを聞こえなくしているようで、実は笑いをこらえているリユート。

「それにしても・・・、あのオルフェがこんな失敗をするなんて・・・。」

でも体が子供になるだけなら、別にどうつてことないんじゃない？
頭脳はそのままなんだから。」

ザナハがこともなげにぶった斬る。

「どうせしばらくしたら薬の効力が切れて、元に戻るんだろ？
だったらせつかく子供に帰れたんだし、子供の特権を満喫したら
どうだ。」

と、ジャックが無責任なことを口走る。その顔は全く心配しておらず・・・むしろ面白がっていた。

「ジャック先輩、そんなことを言ったら大佐は本当に調子に乗って・・・メイド達にセクハラ行為をしてしまうじゃないですか！

ここは洋館に滞在しているメイド、使用人、部下・・・全員に認
知させて甘やかさないようにしなければ！」

その行為はかえってオルフェの生命に危険が及ぶということにも
繋がりそうだ・・・、と全員が思った。

この幼い子供が、あの鬼の大佐だと全員が知れば・・・今まで大佐
にヒドイ目に遭わされたという、恨みを持った人間が
日頃の恨みを晴らすようにするかもしれないからだ。

しかし・・・、もつとよく考えてみれば・・・もしかしたらミラが
言った言葉は、それすらも考慮して発言したのかもしれない・・・
と思うと、背筋が凍る思いだった。

一向に・・・、マトモに心配したような発言が出て来ない状態に呆
れ果てたオルフェは、拗ねた顔で椅子から立ち上がるとそのまま
黙って部屋を出て行くこうとする。

「どうしたんだ、オルフェおぼっちゃん！？」

おしっこか！？ ちゃんと一人で出来るかな！？」

アギトの悪態に、完全にブチンと・・・何かがキレた。

「ごうごうごう……つとオルフェの背後から怒りの仁王像が現れているようなオーラが放たれて、アギトをギロリと睨みつける。だが……どんなに冷徹に睨みつけようとも、元々の顔が子供ながらに端正に出来上がっているせいで……オッサンの時のような伶俐な部分は十分に発揮出来ずにいた。」

「後が怖いんですけど……。」

アギトの暴言に……オルフェが元に戻った時のことを想像して、リユートがぼそつと呟いた。

不可抗力とはいえ、自分の不注意のせいでこうなってしまった……ということもありオルフェは口をつぐんだまま、アギトの暴言に対して無視を決め込んでいる様子だ。

「とにかく、このことを他の者には口外しないようお願いしますよ。」

余計な面倒事は避けたいですからね、……とりあえず私は急用で出かけたことにでもしておいてください。」

綺麗だが無愛想な表情でそう言うと、子供服に身を包んだオルフェはそのまま部屋を出て行ってしまふ。

しゅんと……残されたメンバーはしばらく沈黙を続けている。アギトはまだ笑っていたが。

「ひとまず……、ここは大佐の言う通りにしましょう。」

大佐自身慌てている様子がないようなので、恐らくジャック先輩が言ったように時間が経てば元に戻るんでしょう。

それまでの間は、大佐は急用で留守にしている……。

私達で口裏を合わせておくようお願いします、それから子供の大佐については……そうですね。

とりあえず大佐の親戚の子供・・・ということにしておきましょう。」

「それってベタ過ぎじゃね？」

アギトがつつこむが、ミラは「親戚の子供」という意見を変えない。

あまりにオルフェそのものなので、全く血縁関係のない子供にしてしまえば他の者が不審に思うと考えたのだ。

ともかくこのことを知っているのはアギト、リユート、ザナハ、ドルチエ、ミラ、ジャックだけである。

いつ戻れるかわからないが、それまでの間は全員で取り繕うことにした。

そろそろジャックとの修行の時間だと言って、リユートは訓練場へと向かう。

いつもなら合同訓練と称して、全員で訓練場に行くのだが今はオルフェがあんな状態なので修行してもらうことは困難だった。

しかし、アギトは何か悪巧みを思いついたのか・・・キラーンと青い瞳が光るとそのままオルフェを探しに行ってしまう。

その背中を見送るリユートは、心の中で「あまり余計なことをしない方が自分の為なのに・・・」と呟いた。

この洋館にいる子供は、少ない。

しかし軍事施設のようなこの建物に子供が4人もいるのは、多いかもしれないが。

それでもこの建物の中を子供が出歩いていたらかなり目立つはず、そう考えたアギトは適当に「金髪の男の子を見なかったか？」と質問しながら洋館内を回った。

やはりアギトの考えが的中、この洋館でオルフェの親戚だという子供が出歩けば嫌でも目立っていた。

今は図書館にいるらしいという情報が入って、アギトは場所を聞いてから走っていく。

他のドアとは異なっていて、少し古ぼけたドアを見つけるとアギトはノックもせずにバターンと勢いよく開け放った。

その勢いのせいで埃っぽくなっていった室内から、埃が舞う。

ごほごほと咳き込みながらアギトは中を見渡すと小さな頭を発見、誰かが入って来たことは今の勢いからすれば確実にわかるはずなのに確実に無視していた。

オルフェに間違いない。

アギトは本棚にしまいきれていない山積みの本の間をぬって、オルフェの元へと歩み寄る。

「お〜いオルフェ〜！」

修行する時間が来たから、オレと一緒に修行してくれよ〜！」

にやにやと悪巧みを含んだ笑みを浮かべながら、アギトはわざとらしく誘った。

アギトの考えはこうだ。

いつもならオルフェの実力によく歯が立たないアギトだが、魔法薬の効力のせいで子供になってしまった今のオルフェ相手なら勝てるかもしれない・・・！

てゆうか逆にコテンコテンのメッタメタに叩きのめす絶好のチャンス到来！・・・という算段だった。

うんざりしたような態度を全面的に出しながら、オルフェは溜め息をつきながらパタンと本を閉じて振り返る。

「・・・オルフェ大佐は外出中ですよ。

ちなみに今の私はオルフェという名前ではなく、エルネストです。間違えないでください。」

(えるねすと〜!?)

心の中で大笑いしながら、アギトは必死に笑いをこらえて修行の催促を再度する。

不審な表情を浮かべながらもオルフェは涼しい顔で立ち上がると、ようやくアギトの希望に応えることにしたようだ。

図書室を出るとちょうどミラと出くわし、声をかけられる。

「あら、二人は仲がよろしいんですね？」

どこかへ遊びに行くんですか？」

これもきつとイヤミだろうとアギトは思いながら、これからオルフェと修行しに行くかと告げた。

それを聞いた時、ミラはちらりとオルフェの方に視線を送る。

オルフェはいつものように涼しい顔で、しれつとしていた。

言葉を交わしたわけではないが、ミラはすれ違いざまに忠告のような言葉を発する。

「・・・お大事に。」

その言葉を耳にしたアギトは、笑いがこらえきれなくなる。

きつと勘の鋭いミラのことだから、これからアギトが日頃の恨みを晴らすべく弱ったオルフェをコテンパンにすることを察して

可哀想で気の毒なオルフェに別れの言葉を口にしたんだと思った。

勿論さっきの言葉はオルフェにも聞こえていた、しかしアギト程表立って表情を露わにしていなかったが・・・わずかに口の端に

笑みを作っていたことは……、アギトからは死角になって表情が見えていなかった。

訓練場に入ると、すでにリユートが訓練をしている真つ最中だった。

後になってアギトとオルフェが入って来たのを見て、ジャックが怪訝な顔になる。

「どうしたアギト、今日は修行出来ないだろ？」

それともオレに稽古をつけてほしくて来たのか？」

にやっと笑みを浮かべながら、アギトは仲睦まじいという風にオルフェの肩に優しく両手を乗せるとお茶目に宣言した。

「今日はこのエルンスト君に、剣のおけいこをつけようと思ってさ！
な、エルガスト君！？」

「……エルンストです。」

わずかに……ふつふつと怒りのバロメーターが上昇しているのが目に見えて、恐怖を感じているリユートだったがアギトの暴走はどうやら止められそうにない雰囲気だった。

アギトの提案を聞いたジャックは、頭をぼりぼりと掻きながらバツの悪そうな顔になると言いにくそうに何か言おうとする。

「あ……、アギト？」

今日はもつと別のことした方がいいんじゃないのか、せつかく修行が休みになるんだから……今日は休息をとっておくとか。

色々あるだろ。」

ジャックのもごもごとした言葉に、アギトは深読みすることなくジャックの背中をバシバシと力一杯叩くと明るく返した。

「なぐに言っただよ！」

オレ達は早いとこレベル上げなきゃいけないだろ、休んでる暇なんてないじゃんか！

それにオレはものすんごくく、エベレスト君と遊んでやりてえんだよ！」

「・・・もう何でもいいです。」

呆れ果ててつつこむ気力すら失せたオルフェが率先して訓練場の武器庫の方へ歩いて行くと、そこから適当に竹刀を手にして「剣のおけいこ」の準備に入った。

体が小さくなっている分、体型に合った物がなかなか見当たらなかったが・・・アギト達がここに来たことよって子供サイズの武器も一通り揃えておいたので、その準備がこんなところで役に立っていることに・・・複雑になっている様子だ。

「おっ！ やる気満々じゃねえか！」

「そんじゃオレも竹刀にしようっと！」

意気揚々と竹刀を手にして訓練場に戻って来る。

不安そうに見つめるジャックとリュートを余所に、アギトとオルフェによる「剣のおけいこ」が開始した。

「さあ、どっからでもかかってきていいんだぜ！？」

こう見えてオレも結構自主トレしてきたんだからな、オルフェがメイドと遊んでる時も、図書室にこもって本読んでる時も、

事務仕事とかゆつて執務室でエロ本眺めてる時も！」

「エロ本なんて読んでませんよ、失礼ですね。」

少しムツとした顔になると、そのまますつと・・・真剣な表情になり、全く隙のない姿勢を取った。

ピン・・・と空気が張り詰める、当然アギトもそれを感じ取っている。

さつきまで余裕の笑みを浮かべていたアギトだったが、オルフェの一部の隙もない状態に冷や汗が額をつたう。

(・・・おいおい！？ 聞いてねえぞこの展開！！)

ガキバージヨンだったらオレの圧勝だと思つてたのに、何なんだよこの威圧感は！！

何でこのオレがどう見ても年下バージヨンのオルフェに圧倒されてんだって！！)

悔しさから判断力を失つたのか、アギトは無謀にも真正面から突っ込んで行つて・・・あえなく1本取られてしまった。

頭を思い切り竹刀で殴られて・・・そのまま、アギトは気を失つてしまう。

その光景を一部始終見ていたリユートとジャックは、深い・・・とても深い溜め息をついていた。

「・・・だから言つたのに。」

二人の声が綺麗に八モる。

オルフェはフンつと鼻を鳴らすと、そのまま倒れこんだアギトの方へ竹刀を投げつけるとすたすたと訓練場を後にした。

そのまま真っ直ぐ図書室へ戻ろうとしたら、息を弾ませて走って来

たミラと鉢合わせる。

「今日はよくすれ違えますね、中・・・ミラさん。」

嘘っぽい笑みを作りながら声をかけると、ミラはそのまま苦痛を浮かべた表情で・・・瞳を潤ませていた。

普通の状態でないことに気付いたオルフェが怪訝な表情を浮かべるが、先程すれ違った場所を思い出すと・・・理解した。ミラがなぜ・・・あんな表情を浮かべているのかが。

オルフェは回りに誰もいないことを確認すると、小さく溜め息をもらし・・・両手をポケットに突っ込む。

「・・・見られてしまったようですね。

ここで話すのもなんですから、とりあえず私の執務室に行きましようか。」

ミラは黙ってその言葉に従うと、二人で執務室へと向かった。

中に入り、オルフェは執務室にある来客用のソファに座り込むと重い口を開く。

「私が図書室で何を調べていたのか・・・知られてしまったからには隠していても意味がありませんね。

・・・その通りです。

私が誤って浴びたこの薬の効力は、一生消えることはありません。つまり私の体は一生このまま・・・ということになってしまますね、困ったことです。」

苦笑しながら淡々と話すオルフェに、ミラは瞳を潤ませたまま怒鳴った。

「笑いごとではありません!!」

そんな体でこれから先、一体どうするんですかっ!?

元に戻れないなんて・・・、そんな大変なことをどうして一人で抱え込んで黙ってたりしたんです!

そんなに私のことが信用出来ないんですか・・・?」

消え入るような声で、ミラは喉の奥に何か異物が詰まったように・・・
・そのまま視線を落としてしまった。

「・・・すみません、別に信用していないとかそういうことではないんです。

どうも私は話すタイミングをよく間違えてしまうようですね・・・
・そんなつもりは全然ないんですが。」

ソファの背もたれにもたれながら、オルフェはミラの方を向かずにはそりと呟く。

「・・・記憶も退化してしまうと、本にはありません。

それでは大佐の記憶は今の肉体と同じ時期にまで、退行してしまうということなんですか!？」

震えた声でミラがそう聞くと、オルフェは静かに首を縦に振った。頭を抱え込むように必死になって感情を抑え込むと、ミラは突然すつと立ち上がり・・・オルフェをそつと抱きしめた。

「・・・中尉!？」

突然の・・・、全く予想していなかった行為にオルフェは珍しく戸惑いを隠せなかった。

わずかに香る匂いに、思わず頭の芯がマヒしてしまうような錯覚に

襲われた。

ミラは力の限りオルフェを強く抱きしめると、悲痛な声で・・・小さく囁く。

「必ず私が治してみせますから・・・！」

今の・・・、記憶がある内に解毒剤を完成させれば大丈夫・・・っ！

大佐はきつと、元に戻れますから！」

意外な言葉だと、オルフェは思った。

てつきり他のみんなと同じように、面白がって・・・いつそのままでいればいいのと言われるかと思っていた。

一番に、ミラがそう強く思っていると信じていた。

ほんの少しだけ胸に痛みが走ったオルフェは、逆にミラを慰めるように背中を手を回そうとしたが・・・すっと体が離れていく。

笑顔の戻ったミラは、オルフェの頭を優しく撫でると同じ視線の位置に姿勢を落としたままオルフェを元気づけた。

「今すぐ資料を調べ直して、解毒剤を完成させますから。」

大佐は薬品に使用した成分をメモに全て書きだしておいてください、それを元に抗生物質の割り出しをします。」

それだけ告げると、ミラはすぐさま執務室を出て行って・・・恐らくオルフェが実験を行っていた実験室へと向かったのだろうと推察した。

オルフェは撫でられた頭を片手で触りながら、複雑な顔で天井を見上げていた。

数時間後、アギトは目を覚ました。

一応リユートに介抱されて、訓練場のすみっこに追いやられていたが。

頭がズキズキすると思いながら、記憶をたどる。

そして苦虫を噛み潰したようにあからさまに不満一杯の表情を浮かべていた。

アギトの意識が戻ったのを見て、リユートとジャックはとりあえず修行を終了して駆け寄る。

「やっと気がついた・・・、もう！

アギトが調子に乗って大佐にちよっかい出すから、そんな痛い目を見る羽目になるんだよ!？」

「ちゃんと反省してよね。」

アギトは耳が痛い思いをしながら、そのまま視線をジャックの方に移して・・・ぎろつと睨みつける。

視線の意味に気がついたジャックが軽く謝って言い訳した。

「すまんすまん、ほら・・・一応回りには事情をよく知らない連中もいたからへたなことが言えなくてな。」

別に面白がつてわざと黙っていたわけじゃないぞ!？」

しかし、この軽過ぎる謝罪からいって半分は面白がつていたなとアギトは疑った。

とにかくもう夕食の時間だと、全員食堂へと向かうことにした。

食堂に入ると、何やら騒がしいことに気がついて人だかりが出来る場所へと行ってみる。

するとそこにはオルフェぼっちゃんがいて、メイドにきゃあきゃあ言われていた。

どう見てもハーレム状態な場面に全く面白くないアギトは、ケツ!

と苛立ちを見せながら遠く離れた席に移動する。
だがその時、妙な会話が聞こえて来た。

「僕……、なんでこんな所にいるんです？
ここは一体どこなんですか？」

しらじらしい演技で、回りのメイド達の同情を引こうとしている
と思ったアギトはますます面白くなってきた。

乱暴に席に座るといつもならウエイトレスがメニューを聞きに来る
のだが、オルフェに夢中になっているのか……一向に聞きに来る
気配がなかった。

「なんだよ、女ってどうしてああいうすましたガキがいいのかねえ
！？

「つーか、ここにもっと愛らしいガキが二人もいるってのに……
この態度の差は何なんだっつーんだよ！」

「誰が愛らしいって!？」

後ろから不快な声が聞こえて来て、アギトの機嫌はますます悪く
なる。

振り向くとそこにはザナハとドルチェが立っていて、同じく食事を
しに訪れたようだった。

ザナハはちらりと人だかりの方に視線を送ると、オルフェの気ぶ
りに納得している様子だ。

「まあ確かにものすごくいいとこのお坊ちゃんに見えるからね、
無理もないんじゃない？

素材が違いすぎるもん。

向こうはサラサラのブロンドだけど……、こっちはガチガチで

ツンツンの青髪だし。

白い柔肌に対して、日焼けと傷だらけ。

憂いのある涼しげな目元とは違って、目つきが悪くてひねくれた三白眼。

品性と気品のある上品な物腰とは逆に、ガサツで品性のかけらもないチンピラとくれば……。」

「お前……、言いたい放題だな。」

しかし内心では少しだけ納得しているのか、いつものように否定する言葉は出ないようだ。

ザナハの暴言に更に不機嫌に輪をかけているアギトの横で、ドルチエが小さな声で違和感に気付いている様子だった。

「……何か様子がおかしい。」

「おかしいって……、大佐が子供になってしまったのがバレないように演技しているだけでしょ？」

それにしてもものすごく役作りがしっかりと出来ているようだけど……、大佐なら造作もないんじゃないかな。」

うんうん……と、アギトとザナハは首を大きく縦に振る。

しかしドルチエの言った言葉が少し気になるのか、しばらく様子を見ることにした。

「すみませんが、僕は先生に用事があるんで失礼したいんですが。」

……ユリア先生がどこにいるか、誰か知りませんか？」

「ユリア？　ここにユリアっていうメイドはいないわよね？」

「・・・あなた達では話になりませんね、僕は急いでいるんです。早く先生に僕の理論を聞いてもらいたいから、・・・そこをどいてください。」

「いや〜カワイイ！！ このツンとした物言いがたまらないわ！まるでオルフェ大佐に叱られてるみたい！！」

「何わけのわからないことを・・・、オルフェは僕です。いいから早くそこをどいてください。」

「・・・消しますよ。」

冗談だと思った。

しかしオルフェが右手で火球を作り出した瞬間、メイドを押しつけてジャックがオルフェを片手に抱えるとそのままその場をごまかした。

「あ〜お前等、この子はホームシックにかかっているみたいだから話はまた今度な！

それじゃー！！」

そう言うと、半ば強引にその場を突っ切るように・・・ダッシュで食堂を出て行ってしまふ。

その光景をずっと眺めていたアギト達は、しばらく事態を把握するのに手一杯なせいか・・・目が点になっていた。

「今・・・、おかしかった・・・よね？」と、リュート。

「今のマナの密度からいって、本気の火球を作り出そうとしていた。」と、これはドルチエ。

「今……、自分で正体をバラしてたような……？」と、ザナハが唾然とした顔で呟く。

ようやく、全員の呟きをヒントにおかしな点をまとめ上げたアギトが結論を出した。

「中身もガキの頃に……、戻ってるってことか!？」

全員沈黙した。

それから乾いた笑いをもらしながら、……食堂中に響き渡る位の絶叫がこだます。

「それってヤバくね!? マジやばくね!? つか何でヤバイかわかんなくね!？」

「アギト、動揺しすぎだつて! ヤバイのは確かだけどさ……もう少しその……とにかく落ち着いてよ!」

リユートが何とか落ち着きを取り戻そうとするが、やはりリユート自身も動揺が隠せず……言葉を噛みそうになる。

眉根を寄せながら頭を抱えるザナハが、鶴の一声でパニックを鎮めようとした。

「とにかく! ここはミラやジャックと相談するべきでしょ!？ 今後の旅のことを考えてもオルフェは重要人物になるんだし……、このままでいいはずがないわ。」

ジャックは今頃とつくにミラン所に行ってるはずだから、多分円卓会議室じゃないかしら。」

4人は互いに頷き合って……、それからきつちり食事を終えてか

ら円卓会議室へと向かった。

緊張感や緊迫感が全くない様子で、アギト達は満腹の状態になっていた。

一応ノックしてから、返事を待つこともせず円卓会議室に入ると・
・そこにはどんよりとした二人が
イスに座っている。

ミラとジャックだった・・・。

「あれ・・・？ ガキバージヨンのオル・・・じゃなかった。
アスベスト君は！？」

げえ〜つぶ！ と思い切りゲップをしながら聞くアギトに、ザナ
ハはあからさまに嫌な顔をしている。

まるで通夜のような顔で、ミラが呟くように答えた。

「大佐なら洋館のどこかをうるついていますよ・・・。」

「え・・・、ダメじゃないですか！

さつき危うくメイドに向かって炎系の魔法を撃とうとしてたのに・
・、危険じゃないですか!？」

「それは大丈夫です・・・。」

この洋館にいる人間の誰一人として傷付けてはいけないと、言い
聞かせましたから・・・。」

がつくりとしたままで、ミラが続ける。

「よく言うこと聞いたわね・・・。」

あの様子だと他人の言うことなんて聞きそうにない雰囲気だった

「ただけど・・・!?!」

ザナハが不思議そうに尋ねると、もはや答える気力さえ失ってしまったミラに代わってジャックが答えた。

「ああ、それなら簡単だ。

ユリア先生の指示だから・・・って言えば、あいつは何でも言う通りにするからな。

幼少時代のあいつの世界は、先生一色に染まってるから・・・。だから大人しくしてる今の内に、どうにか元に戻る薬を作らなきゃならないんだが・・・。

ともかくヴィオセラスの奴等も巻き込んで薬を作っておくから、お前等!

それまでの間、オルフェが何も問題起こさないように見張っててくれ・・・な!?!」

「えっ!?!? ちょ、待・・・っ!

何でオレ達が面倒みなきゃなんねんだよ、チビバージョンのオルフェの面倒ならジャックとミラの方が慣れてんじゃねえのかよっ!」

だがしかしアギトの叫びも空しくジャック達は、そそくさと逃げるように円卓会議室を出て行ってしまった。

愕然とした表情で、リユートはズバリ断言する。

「面倒事・・・、押しつけられたっ!」

仕方なくアギト達は洋館のどこかをうろついているというエルネスト君を探し回ることとなった。

レシピ・4 「オルフェの華麗なる日々・前編」(後書き)

基本的に1話完結モノにするつもりでしたが、なかなか終わり時
が掴めず結局「つづく」という形になってしまいました。

この話はかなり前から少しずつ書きためていたもの・・・。
オチは出来てるんですが、そこまで持つて行く間の話を考えていな
いのでかなりの時間を要してしまうと判断し、前後編に急ぎよ変更
させていただきました。

レシピ・5 「オルフェの華麗なる日々・後編」(前書き)

前話から恐ろしい程の月日が経ちました。ようやく書き終えました、後編です。

前後編に無理矢理まとめたので、後編は1万文字超えてしまいました。

少々長くなりましたが、最後まで読んでもらえたら幸いです。

レシピ・5 「オルフェの華麗なる日々・後編」

実験に失敗したオルフェは人間の肉体を幼少時代にまで逆行させてしまうという薬を自ら浴びてしまい、三十二歳のいい大人が八歳の子供へと変身してしまった。

しかもこの薬には副作用があり時間が経つと脳内にも影響を与えて、記憶などが全て8歳の頃に戻ってしまうという……。

事態を重く見たミラとジャックはすぐさま洋館に滞在しているヴィオセラス研究員をも巻き込んで解毒薬を作ることになった。

解毒薬が出来るまでの間、一応は大人しくするように言い聞かせてあるのだが実際の所何をするかわからないのでアギト、リュート、ザナハがオルフェの面倒を看ることになってしまう。

洋館のどこかをうろついている子供バージョンオルフェを探す為に、アギト達は奔走するのであった。

洋館の外にある森の中、オルフェはメイドや兵士がうろついている洋館内に嫌気が差して外をうろついていた。

当然洋館の周囲にある森にはレベルこそ低いが魔物が出現する、しかしオルフェはそれら魔物が出現する度に次々と魔術で一掃しつつ散歩に耽っている。

そんな時、両手をズボンのポケットに突っ込んで歩いているとポケットに何か紙切れが入っていることに気がついたオルフェは無表情のまま紙切れを取り出して眺めた。

「手紙、何かのメモ？」

4つ折りにされている紙切れを広げると中には文字が書かれていたので、オルフェはそれをなぞるように目で追った。

「……自分説明書」

立ち止まったままオルフェが紙切れを読み進めていると洋館のある方から声が聞こえて来て、すぐさま紙切れをポケットの奥に突っ込んでから振り向いた。

後方から青い髪をした少年二人と淡いピンク色の髪をした少女が走って来る。

「うおーい、オルフェーっ！ てめえ洋館から出て行って何してやがんだクラァーっ！」

一人で外出したら魔物とかが出て来て危ねえだろうがあっ！！」

怒り心頭の形相で叫ぶアギトに、オルフェはあからさまに迷惑そうな表情を見せるとフンっとな鼻を鳴らす。

よっぼど慌てて追いかけて来たのか三人とも肩で息をしながらようやく追いつくと、リユートが安心したように声をかけた。

「と……とにかく良かったよ、無事で！」

大佐が魔物に襲われて怪我でもしたら僕達が中尉に怒られるところだった……っ！」

「それ以前に無事にオルフェが元の姿に戻った時に仕返しされるどころだったわよ、そっちのが恐ろしいわ」

オルフェの無傷状態を確認するなりアギト達が安堵しているのを見たオルフェは眉根を寄せたまま疑問に感じた。

（何なんだこいつら……、どうして身内でも何でもない僕なんかの為にここまで必死になれるんだ？）

そんな風に考えているとアギトがオルフェに向かって洋館に帰るように促す、それを見て更に怪訝な顔を浮かべた。

なかなか言うことを聞かないオルフェの態度にアギトは苛立ちを感じつつも今目の前にいる人物は、自分より年下の子供なんだと言いつつ聞かせながらグツと怒りを堪える。

「何してんだよ、ほら！」

みんな心配してんだからさっさと帰るぞ、オレ達がガードしてやつから早くついて来いよ！」

「別にガードなんかいらないよ、この辺にいる魔物は随分レベルが低いみたいだから僕一人でも十分に殺せるから」

「ナマイキ言ってるじゃねえって、武器もねえのに危ねえだろうが」

ひくひくと血圧が上がるアギトを制するように、リユートが一歩前に出てオルフェに言い聞かせようとす。

「確かにこの辺の魔物は弱いし大佐の魔術の方がすごいかもしれないよ？」

「だけでもし群れで襲われたりしたら、いくら大佐でも不利になっちゃうよ。」

「そうなくてももし怪我でもしちゃったら取り返しがつかないからね。大佐って確か、回復魔法の類は扱えないはずでしょ？」

そう指摘されたオルフェは凶星だった為か、珍しく言い負かされる様子で言葉を詰まらせている。

しかしそれでも焦った態度だけは表に出さず……あくまで冷静さ

を装ったままだ、そんなオルフェの背中をぽんつと叩くとザナハが優しく促した。

「ほら、わかつたら一緒に帰りましょ！」

帰ったらメイド達がオルフェの為にプディングを作ってくれてるみたいだから、今日一日はみんなで楽しく過ごすのよ」

（ みんなで？ ……ウザいな ）

オルフェは面倒事を避ける為にあえてそれを口には出さなかった、ここまでの流れから余計なことを口にすれば更に面倒なことに青い髪の毛のツンツン頭が目くじら立てて怒りだすから、それを避ける為に大人しく従うフリをしたのである。

洋館へ帰る間、オルフェは極力アギトから距離を離れた。

どうにもアギトとは両極端な気がして仕方がなかった為だ、アギトに至っても始終イライラした様子であり、まさに二人は水と油の関係そのままである。

そんな二人に苦笑しながらリユートが間に立つが、洋館に到着するまで、結局二人が和解することはなかった。

（ 自分説明書……、面倒だし理解不能だけどとりあえずメモの通りに見してみるか ）

洋館に到着してからというものの、その後のオルフェは更に別人のようであった。

オルフェのことをもてはやすように騒いでいたメイドに対して嫌悪感を露わにしていたはずなのに、今ではまるで子供が甘えるようにべったりとメイド達にくっついて離れなかった。

「お姉さん達、とてもいい香りがしますね。
心地よくてまるで天国にでもいるようです、このまま眠りに落ちてしまいたいそうな……そんな甘みを感じますよ」

そう言いながらオルフェはメイドの豊かな胸に顔を埋めるように、思う存分ハーレム状態を楽しんでいるようにも見えた。

しかしメイド達は相手がまだ子供だからと、オルフェにそっくりで綺麗な顔立ちをしているからという理由で全く抵抗の意思を示すことなくオルフェの思うがままに戯れている。

「僕、大きなお風呂に入ったことがないんです。

一体どうしたらいいのかわからないんですけど、色々教えてくださいませんか？」

「やだ　っ！大佐に似てエッチなんだからあっ！

いいわよ、私達が綺麗にしてあげるからね。みんなと一緒に入りましよ！」

そんな異常な光景を目にしながらアギトとリユートは虚ろな瞳で、釈然としない眼差しで見つめていた。

「つか、オレ達とそうたいして年齢変わんねえじゃん。

何で風呂の入り方がわかんねえんだよ、何でどうしたらいいかわかんねえんだよ、何で誰一人としてつつこまねえんだよ」

「さつきまでとは百八十度別人だよ、どっちかっていうと大佐そのものに近いんじゃないかな」

「まさかこれも薬の副作用とか言わないわよね、もしそうならオル

フェ…… どんだけ卑猥なモン作ってんのって話だわ」

三人がオルフェのハーレム劇場を冷たい眼差しで見据えながらプディングを頬張っている、無表情な上に無感情な様子であったがメイドの方が一方的に随分と楽しそうに遊んでいる所を見て、これ以上オルフェの面倒を見る必要性を感じなくなったアギトは始終イライラした様子のまま剣を手に食堂の席を立った。

「あれ、アギト……どこ行くの？」

まだプディングを食べ終わっていないリユートが訊ねる、するとアギトは横目でちやほやされているオルフェを一瞥しながらふてくされた口調で答える。

「修行だよ、腐れ師匠があのだかんな。

見ても腹が立つただけだし、マナコンがまだ完璧じゃねえから精神統一する為に静かな所に行つて来る！」

そう言つてアギトが食堂を出て行こうとしたのでリユートは自分もついて行こうと、慌てて綺麗に全部プディングをたいらげて食器をカウンターに持って行くと走つて追いかけた。

「ちよつと！ ミラに面倒見るように言われてたでしょ！？ あれ……どうすんの！？」

一人だけ置いてけぼりされてしまったザナハは口元にプディングの欠片をつけたまま怒鳴つたが、二人がさつさと食堂を出て行つてしまったので怒声は空しく響くだけであった。青い髪の少年二人が出て行った所をオルフェは視界の端に入れていた、口うるさいのがいなくなつて清々したと思ひながら そのままくだらないハーレ

△状態を続ける。

メイド達とおやつを食べ終わった後、オルフェはその後もメイド達と一緒に遊んでいた。遊びの内容は実に下らないものであり、露出度の高いメイド服に着替えさせた彼女達に目隠しをさせて鬼ごっこをさせたり、負けたら着ている物を一枚一枚脱いで行くという罰ゲームを取り入れたボードゲームをしたり、とにかくオルフェは心の底からうんざりしていた。

(どうして大人の男ってのはこういうのが好きなんだろう……?)

いい加減メイド達と戯れることに飽きてきたオルフェは今度はかくれんぼと称して、隠れるフリをして再び洋館を抜けだすことを思いついた。楽しそうな笑みを浮かべ、愛想を振りまいて従順に従うフリをすればメイド達は簡単に信じる。それを利用してオルフェは自分が鬼になると言い出して数を数えるフリをし、メイド達が隠れたの見計らうと探してるフリをして洋館を出て行った。

当然玄関先や洋館の周辺には巡回している軍人がいる、しかし一度洋館を抜け出した時に彼等の巡回位置などを把握していたので彼等に見つかからないようにうまく洋館を離れて行った。

ポケットに両手をつっ込みながら歩き、大人のオルフェが持つていた小型の懐中時計を見て時間を確認する。『自分説明書』とやらに書かれていた内容を思い出し、逆算してみる。

「とりあえず書かれている内容の殆どは実行したことになるから、もうそろそろいいかな」

ようやく下らない指令を終えたと思ったオルフェが道を歩いて行

くと、またしてもレベルの引くスライムが姿を現す。敵が弱いことがわかつているオルフェは深い溜め息を漏らしながら、呪文の詠唱に入った。すると後方からもがさがさつと音がして瞬時に振り向くするとオルフェの背後には二十匹程のスライムが群れをなしてこちらを威嚇している。

「……………くっ！」

道の真ん中で行く手を遮られてしまったオルフェはこれだけの数を相手にするには呪文の詠唱が間に合わないと察して、途中まで唱えていた詠唱を中断してしまった。今唱えていたのは単発のファイアーボール、これを前方にいるスライムに放った所で後方に控えているスライムが一斉に襲ってきたらひとたまりもないと踏んだのだ。じりじりとオルフェに詰め寄って来るスライム達、例え相手がか弱いスライムでもなぎ払うだけの武器すら何も持っていない状態。まさか足元に落ちている短い木の枝を武器にするわけにもいかない、オルフェは小さく下を打つと本意ではあるがそのまま開かれた道を行かずに、獣道である森の中へとすかさず飛び込んだ。

走り去って運良くスライム達を撒ければ問題ないのだがそう都合よく行くわけもない、オルフェはここが一体どこなのか地図を見たわけじゃないので具体的な位置を把握出来ていなかった。ただ自分が歩いて来た方向　洋館がある方向だけはわかっていたのだが、スライム達はそちらの方向へ行かせまいとしているのか旋回しようにも大勢のスライム達が洋館のある方角を遮っていたので戻って軍人に助けを求めることすら出来ない。

スライムは追いかけて来る速度が特に速いわけではないが、子供の足では追いつかれるのは時間の問題であった。はあはあとさすがに息が切れて来たオルフェはちらちらと追いかけて来るスライムとの距離を測りながら、仕切りに周囲の景色を観察しつつ何か打つ手

はないか必死で思考を巡らせた。

すると微かに激しく水を打つ音が聞こえて来て、近くに滝が何かがあると察したオルフェはすぐさま音のする方へと走って行く。ぴよんぴよんと跳ねながらスライムもオルフェの後を追いかけて行き、やがて生い茂っていた木々から出て 開けた場所には大きな川があり、下方へと川の水が打ち付ける水しぶきが霧状になっていた。

オルフェは一目見て、この先が大きな滝になっていることを瞬時に察する。

後ろを振り向くとスライム達も追いついており、周囲を囲まれてしまう。オルフェはじりじりと後退しながら短い詠唱で済む下級の炎系魔術を唱えた。小さな火炎球を作り出したオルフェはそれをすぐ近くにいるスライムへと放つと、ぐじゅっという音を立ててまっすは一匹を仕留めることに成功する。

「あと……十七匹、分が悪いにも程があるな……」

こんな時、飛び道具か……はたまた槍のようなものでも投げつけて敵の注意を引きつけることが出来たら、次の行動への時間稼ぎ程度にはなったのかもしれないのと少しばかり後悔の念に駆られるが、ないものは仕方がないと割り切るオルフェ。

せめてもう少し火力の大きな魔術を詠唱出来るだけの時間を得ることが出来れば、窮地を脱することが出来るであろうと舌を打った時、突然スライム達の行動が統一性を持って散り散りになっていた者達が一斉に集まり出した。

何をするつもりなのだろうと目を瞠っていると、スライム達は軟体の体を利用して合体していく。合体することにより数が減るにつれ、大きさを増していくスライム。最後の一匹になった頃にはおよそ五メートル程の大きさにまで達していた。スライムが揺れる度に

足元が激しく揺れて、小さな地震でも起きているかのようだ。巨大化したことによりオルフェを圧倒しようとしたのか、脳を持たない彼等にそんな思考が存在するのか。

今のオルフェにとってそれは些細なことである。

問題は巨大化したスライムだ、しかしオルフェは先程に比べると余裕の態度を保っていた。まるでこれこそ待ち望んでいたチャンスと言わんばかりの、不敵な笑みである。

「頭の悪い奴はこれだから助かるね、と言ってもスライムには考える脳がなかったな。

なんでもでかくなればいいってもものじゃない。

大きくなれば動きは鈍り、僕の行く手を阻むことも出来ず、魔術の的を外すこともない。

僕の勝ちだ」

そう呟くと同時にオルフェは素早く詠唱に入った。その間にも巨大スライムは上下にバウンドしながら徐々に、しかし確実に八方塞がりとなっているオルフェ目がけて跳ねて行く。

しかしその動きはとて鈍く、跳ねて進んでもその重みで高く飛んで移動することが出来ずに、もたもたと進む程度であった。地面に着地する度にどずんという鈍い音を立てながら前に進んではいるが、それでも合体する前の 単体でいた時の方が遙かに進むスピードは早かった。その様子を見てにやりとしたオルフェは、巨大スライムがこちらへ来るより早く詠唱が終わることを確信した。

そして案の定、巨大スライムがオルフェの元へ辿り着くまでに呪文の詠唱が完成する。

「全ての生命の源よ、燃え盛る赤き炎よ、我に仇なす敵を焼き尽くせ、 イラプション！」

紡がれた言葉と共に巨大スライムのいる地面から巨大な円状の炎が現れ、そのまま巨大スライムを火力で持ち上げるように凄まじい炎の固まりが巻き上がった。ぶよぶよとした体はみるみる炎によって溶け出し、耳障りな奇声を発しながら体を保てなくなっていく。やがて炎に完全に飲み込まれた巨大スライムの体は地面の上にジェル状の肉片をぶち撒け、なおもその肉片を逃さんとするように炎が飛び火しては跡形もなく燃やし尽くそうとしていた。

周囲にはスライムの焼け焦げた臭いが充満し、吐き気をもよおす程の悪臭が鼻を刺激した。それでもオルフェは眉根を少し寄せるだけでその表情に恐怖感も、憐れみも何も浮かんではない。

あるのは「邪魔な存在を滅した」という満足感にも近い安堵だけであった。これで自身の危険は回避された。そう思ったのも束の間、オルフェは先程の魔術による衝撃が今立っている崖にも影響を及ぼし、今にも崩れ去ろうとしていることに全く気付いていなかった。最初はまるで小さな地震のような微かな揺れが、それから次第に立っていることでさえままならない程に足元がおぼついた。

ゆっくりにも崖崩れを起こしていない安全圏へ向かおうとしたが、子供の足ではそこまで行くのにかなり距離があるようにも見えて、瞬時に「終わった」という文字がオルフェの脳裏を駆け巡った。

オルフェは空を飛ぶことなんて出来ない。ましてやそんな呪文なんて知らないし、そんな魔法があるのかさえ今では知識として身につけていない。すぐ側に激しく流れる川があることから、自分はこのまま滝壺へと落ちて行くのだろうと察する。

そう考えたら不思議と諦めがついてしまった。この先まだまだ研究することが出来たであろう、開発することが出来たであろう魔法技術の粋を探求出来なくなることは非常に悔やまれる。しかし頭のどこかでなぜか冷静に終わりを受け入れる自分がいたのもまた事実。このまま終わっても、それはそれで仕方ないことかもしれない。

人間はいつか死ぬ運命なのだ。それが少し早まっただけではない

かと、オルフェは自然とそう思えた。

抵抗することもないままオルフェの足元はどんどん崩れて行く。やがて自分でも気付かぬ内に両膝を地面につき、その両手は地面について四つん這いの状態になっていた。身動きが取れぬままオルフェが両目を閉じた時。

「手を伸ばせオルフェ、早くっ！」

力強い言葉に顔を上げるオルフェ。

目の前には青い髪の少年が必死の形相でこちらに向かって目一杯手を差し出していた。見ると側にある大木に長いロープのようなものの皮製のムチ が括り付けられ、それを握っているもう一人の青い髪の少年リュート。

そしてリュートがムチを掴んでいる手とは逆の手、右手には剣と鞘が抜けないようにしっかりと備え付けの紐で縛った刀身を掴んでいる。刀身の鞘の先にはごつごつとした装飾部分があるお陰で、握っていてもそのまますっぽ抜けないようにしっかりと握ることが出来るようだ。

そしてその剣の柄部分を握っているのはアギトの左手である。アギトは左手で剣を握ったまま、反対側の手をオルフェに差し出してどうにか崖から落ちてしまわないように、自分の右手を掴めと言っているようであった。

死に直面しているオルフェは呆けたように、自分に手を差し出すアギト達を見つめている。まるで自分を救おうとする彼等が奇異な行動をしているような眼差しで。

「何やってんだ、さっさと掴めって言うてんだろこの陰険メガネの生意気小僧！」

悪口雑言を吐きながらもその手を決して引っ込めようとしないア

ギトに、オルフェは不本意そうな表情で手を差し出した。

その瞬間、寸での所でオルフェの足元は完全に崩れてまるで何者かに下へ引っ張られるように、オルフェの小さな体が落ちて行く。それを目にしたアギトはリユートと共に握っていた剣を離し、オルフェ目掛けて両手を伸ばしていた。

「駄目だ、アギト！ 大佐！」

そう叫ぶリユートであったが無情にも二人の体は崩れ行く地面と共に真つ逆さまに落ちて行き、リユートはそんな二人の姿を目に焼き付けることしか出来なかった。

落ちて行きながらオルフェは片手を強く握られている。そこにはアギトが必死の形相でオルフェの右手を掴んでいる様子が見て取れた。無表情のままオルフェと一緒に落ちて行くアギトに問う。

このまま二人一緒に滝壺へ落ちてしまえばきっと助からないだろう、既にそう諦めたような気持ちになっていたオルフェは問うなら今しかないと思ったのかも知れない。

「どうして僕なんかを助けようとするんだ。自分の命を危険に晒してまで。そんなに大人になった僕が怖いのか？」

無表情ではあったがそう訊ねるオルフェの口調はほんの少し、アギトに対して興味を示したような、そんな雰囲気を感じていた。不思議そうに訊ねてきたオルフェに、アギトは苛立たしそうに鼻を鳴らすとぶっきらぼうに答える。

「お前バカか！？ 仲間を助けようとするのは当然のことだろ！」

オルフェにとって全く期待してなかった回答。

それはオルフェが最も嫌う答えだった。根拠も何も無い。綺麗事

と捉えてもおかしくない。何より理にかなっていない。そんな期待外れな言葉が返って来て、オルフェはなぜだかとてもなく裏切られたような気持ちにさえなった。

やっぱりこいつは気に食わない。

掴んだまま離そうとしないアギトの手を振り払おうとするオルフェであったが、力ではアギトの方が上だったらしく振り払おうにも相手は更に力を込めて離すまいと抵抗してきた。

何もかも気に入らない。

「そんな下らない理由で死を選んだっていうのか、お前こそ本当の馬鹿だ。愚か者だ！」

ムキになって言い返すオルフェは、アギトの価値観の全てを壊したくて仕方なかった。相容れない存在、自分とは全く考え方も価値観も何もかもが異なる、そんな腹立たしい存在。

こんな奴でももしかしたら自分に理解出来なかったことが理解出来るようになるのかもしれない、もしかしたらユリアの言っていた「生命の重み」や「自分以外の者を慈しむ心」というものを理解するきっかけになったかもしれない。

そんな風に少しでも思った自分がとても愚かしいことのように感じられた。

だからこそアギトの単純過ぎる回答が馬鹿馬鹿しくて我慢ならなかったのだ。

「僕の命なんてどうなるかと、お前に関係……」

「そんなこと言ってる奴が一番ム力つくって言ってんだよ！」

これまでにない怒声を浴びせて来たアギトに、どこか鬼気迫るも

のを感じ取ってオルフェは口を噤んだ。今までどんな大人達も理屈で負かして来たオルフェに怖い者など何もなかった。そんなオルフェに、完璧過ぎるオルフェに怒声を浴びせる者など誰一人として存在しなかったからだ。だからかもしれない。オルフェは驚き、固まっていた。

「自分の命なんかどうでもいいだ！？ ふざけんな！ そういう卑屈なこと言ってる奴が一番腹立つんだよ。自分一人が孤独で、誰にも必要とされてないみたいない方しやがって。お前一人が不幸だつて思い込んでんじゃねえよ！ 世の中には自分と同じ位、いや……自分以上に孤独な奴とか辛い生き方してる奴とかゴマンと居るんだよ！ なのにそうやってすました顔して死んでも構わないみたいな言い方を、そんな歳で口にしてんじゃねえ！ お前が死んで悲しむ奴だつてたくさんいるんだ！ お前は一人なんかじゃねえんだよ！」

「！！！」

オルフェの脳内に光が差し込んで来たような感覚だった。それはとても心地良い感覚で、例えるなら全く新しい魔術の理論を構築した時のような閃きと発想にも似た心地良さと清々しさでもあった。アギトが強く握り返して来る握力、いつの間にかオルフェ自身もアギトの手を強く握り締めている。

無意識の内にオルフェはアギトの言葉を聞き入れ、助けを受け入れていた。

これまで無感情だった自分に、ここまで説き伏せようとした人物が果たしていただろうか。

(……………居た。確かに居た……………)

オルフェは心を落ち着ける。今は自分でも驚く位、ひどく冷静だ。そつと両目を閉じて、胸が締め付けられる思いに駆られる。

（ ユリア先生、彼女だけが僕の……私の心を開放しようとしてくれた）

今は亡き、ユリア先生だけが……。

オルフェは思い出した。

この世にもう、ただ一人尊敬した先生が居ないことを。そして思い出した。

自分にもこうして心からぶつかってくれる人物がいたという事実を。

（どうして忘れてしまったんでしょう、この薬のせいかもしれない。これは肉体だけではなく、精神や記憶までもそっくりそのまま遡ってしまうものだったみたいですね）

いつの間にかオルフェの肉体に影響を与えていた薬は効力を失い、元の大人の姿へと戻ろうとしていた。奇妙なものを目にするようにアギトがぼかんとした表情で見つめていると、下の方から声が聞こえてくる。

「アギトー！ オルフェー！ 怪我はないー？」

その声はザナハのもので、滝壺の側からミラ達と共にアギトに向かって声をかけていた。

ここはクレハの滝。

アギトとリユートは修行の為此に訪れていた所、クレハの滝の上の方から物音と巨大化したスライムの存在に気付き駆けつけたと

いうわけである。そしてアギトとオルフェが落ちた時、駆けつけたザナハが契約を交わしているウンディーネを召喚し、二人をシャボン玉でガードしたのだ。

口論していたこともあって自分達がウンディーネによって作り出されたシャボン玉の中にいることに全く気付かず、呑気に口喧嘩していた。上方からはリユートが安堵した表情で微笑んでいる。

「全く二人とも、落下してる時に口論する余裕があるわけないですよ」

ウンディーネで作ったシャボン玉から出たアギトと、大人の姿に戻っていたオルフェ。

「どうやって、何がきっかけで元に戻ったのか。この場に居る者全員がその答えを待っていた。」

当然最も深刻に状況を捉えていたミラが顔を引きつらせながら説明を求めている。失敗したとはいえ、オルフェが浴びた薬は解毒剤を正確に処方し、それを服用しなければ解除出来ないはず……だと、少なくともミラはそう解釈している。

しかし現にこうして、解毒剤どころか何を理由に元に戻れたのか、それが全く不明のままなのだ。

だがこう解釈することも出来る。

今までミラはその可能性に気付くどころか、思い浮かべることでないなかったが、今にして思えばそう考えた方がある程度つじつまが合うのもまた事実なのであった。

でもそれはあまりに残酷な、これまでの苦労が全て報われなくなる……そんな恐ろしい結末が待っているように思えて、ミラはあえてその可能性に気付かないフリをしていたのかもしれない。

ミラは告げた。

「大佐、最初から全てわかっていたんですね？」

ミラの唐突な言葉にオルフェを除く全員が目を丸くした。一体何のことを言っているのかというように、オルフェとミラを交互に見つめる。しかし当の本人はそれに答える風でもなく、真顔のままミラを見つめるだけだった。

そんな態度が逆に癪に障ったのか、まるでわざとしれつとした態度を装ってるように見えたミラが今度は棘のある口調で続けた。

「大佐が失敗したというこの薬。本当は既に処方箋がわかっていたんでしょ？ 元々何かを作る際、如何なることにも注意を払い、失敗という二文字を決して許さない大佐の事。実験を行なっていたあの部屋で何が起きても大丈夫なように、もしくは何が起きても対処出来るように、実験室にあつた薬剤その全てを大佐は把握していた。その時点でどんな薬剤がどんな形で、どんな風に組み合わせたのか。何千通り、何万通りもある組み合わせの中からこの結果を引き起こす組み合わせを導き出し、そして対処法もつくりにわかつていた。でなければ結果を全てとする大佐らしくありませんものね。このような状況に陥つても大丈夫なように、事前に何かしら手を打っていた。そしてその保証があつたからこそ、今までこうして呑気に時間を過ごされた 違いますか」

まるでどこかの名探偵が推理でもするように、ミラが直属の上司であるオルフェに対して指を差し豪語する。オルフェはまるで完全犯罪と思っていたトリックを見破られた犯人のように、ふっと笑みを漏らし、そして高らかに笑った。

「さすが中尉、見事な推理力です！」

何を企んでいたのかこの場の誰もが理解していなかったが、ミラによつて企みを暴かれたにも関わらずオルフェはなおも勝ち誇つたように堂々と胸を張っている。そんなオルフェの様子にこれ以上怒りを露わに怒鳴り散らす行為自体、馬鹿馬鹿しいように思えたミラは偏頭痛でもするのか、頭を抱えるように煮えたぎる怒りを収束させようと必死の様子であつた。

ミラの推理を全て聞いていたのも関わらず事態を瞬時に把握することが出来ていないアギト達はぼかんとした表情で、オルフェとミラを交互に見つめている。そして最初に口を開いたのはリユートだつた。

「え……、ということでしょうか。大佐はあのまま放つておいても元の姿に戻れたつてことですか？」

「ええ、その通りです。私達はまんまと大佐の手の平の上で転がされていたんですよ。面白可笑しくね」

ミラが最後に付け足した言葉に敏感に反応したのは当然アギトであつた。

「なんじゃそりゃー!? 一体どういうことなんだよっ! オルフェは自業自得による失敗でガキの姿になつたんじゃないのかよ! 最初から保険がばつちりだつたつてオレ達は聞いてねえぞ! 今までの苦労は何だつたんだコラアツ!」

もはや元の姿に戻つたオルフェに勝ち目はないとわかっているのか、アギトは文句をたれながらもオルフェの攻撃可能範囲に近付かない程度の距離を保つたままである。怒りはもつともであつたが結局のところ誰もオルフェに逆らえないという事実だけは何も覆されることがない証拠であつた。

ミラとは対照的に怒りを正面からぶちまけるアギトに、いい加減自分達が馬鹿を見たという現実に頭が痛くなってきたザナハが、ふつふつとした怒りをオルフェではなくアギトに向ける。

「もう……あんたうるさい。お願いだからこれ以上イラつかせないでよ、鬱陶しい」

「まあまあザナハ、イラつく気持ちはすぐわかるけどここは穏便に、ね」

今にもザナハの暴力がアギトに向けられようとしているところにリユートがすかさず間に入る。このままザナハの怒りの矛先がアギトへと向いてしまわないように、余計に話がややこしくならないようにと周囲に気を使う。そんなリユートの気遣いを余所に、オルフェはどこか満足げに三人を見つめていた。その瞳はまるでアギト達のやり取りを温かく見守るような、慈しむような、今まで冷徹な眼差ししか向けた事のなかったオルフェにとって初めてと言ってもいい位、どこか柔らかかみのある眼差しであった。

なぜでしょうか。

周囲に実害が出ない程度の実験を行なうのは、いつものことなのに……。
なぜ今回の実験結果は、こんなにも清々しい気持ちで満たされているのか。

別に何か実用性のある結果が出たわけでもなければ、私自身に利益のある効用があったわけでもないのに。

どうして今回の実験はこんなに楽しいものになったんでしょう。

胸の奥がまだ熱い。

どこかむず痒いような、しかしそんなに不快というわけでもない。

こんな不可思議な気持ちは以前にもありませんでした。

そう、薬の効力が無くなる直前によぎった思い……。

これが、今までの私になかった「人としての心」というやつでしょうが。

悪くないですね。

その後、オルフェがミラによってこっぴどく説教されたことは言うまでもない。

レシピ・5 「オルフェの華麗なる日々・後編」(後書き)

了解済みだと思われませんが、基本的に不定期更新です(申し訳ない)なのでまた気が向いたらのぞきにきて下さいませ。

こちらはいつでも歓迎させていただきます。

拙い話ではございますが、どうぞ本編の方もよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7193h/>

ツインスピカ～追加レシピ集～

2011年10月17日21時58分発行